

2012 年度浦野正樹教授ゼミ卒業論文

## 伝統的祭礼の変容に見る、地域帰属の再構築

—小江戸佐原という地方都市の、町内社会における民主化—

1T090178-7

早稲田大学文化構想学部社会構築論系 4年 大地麻友

## 内容

序章.....	3
(1) 研究背景.....	3
(2) 論文構成.....	3
(3) 研究方法.....	4
第1章 祭の理論と本稿の視座.....	5
1-1 祭と社会状況の関連性.....	5
(1) 伝統的都市祭礼の本来的意義.....	5
(2) 戦後の祭りを巡る展開.....	5
1-2 松平誠、上野千鶴子による祭研究.....	6
(1) 祭りにおける価値の二面性.....	6
(2) 選択縁・選択できない縁の相互関係.....	7
1-3 戦後における地域社会の民主化.....	8
(1) 戦前の日本社会における階層構造.....	8
(2) 階層基盤の崩壊.....	8
(3) 地域社会の再編成と民主化の浸透.....	9
1-4 本稿の視座.....	10
第2章 佐原と祭りの歴史.....	11
2-1 佐原地区の現在の地域特性（地理・人口・産業）.....	11
2-2 戦前の佐原と祭り.....	13
(1) 農村集落期.....	13
(2) 河港商業都市期.....	13
(3) 祭礼の萌芽と展開.....	14
(4) 地域拠点商業期.....	15
2-3 戦後の地域と祭りの変容.....	16
(1) 戦後の地域変容.....	16
(2) 戦後における祭りの変化.....	16
2-4 大祭の再興と、住民活動の勃興.....	17
第3章 佐原の山車祭りの実像.....	21
3-1 祭りの組織.....	21
3-2 町内の実態.....	21
(1) 町内の役職.....	21
(2) 祭りにおける各町内の組織の詳細.....	22
(3) 山車の曳き廻し.....	24
(4) 祭り組織における秩序維持.....	24

3-3 選択縁、選択できない縁の相互関係 .....	25
第4章 地域帰属の再構築 .....	28
4-1 周縁と祭りの関わり .....	28
(1) 祭り関連アクター .....	28
(2) 各種住民団体 .....	31
(3) 図示 .....	32
4-2 佐原社会における民主化の様相 .....	33
(1) 産業構造の変化 .....	33
(2) 町内と祭りの運営にみる、民主化の姿 .....	37
4-3 地域帰属の再構築の姿 .....	40
終章 .....	42
(1) まとめ .....	42
(2) おわりに .....	45
(3) 本稿の到達点と意義 .....	46
謝辞 .....	47
参考文献 .....	48

## 序章

### (1) 研究背景

地方都市の中心市街地で商店街のシャッター通り化が進行し、かつては街の中心だったデパートの倒産が相次ぐ。その一方で、駅を隔てた反対側ではロードサイド店舗が増加し、賑わいを見せる。このような流れは、日本国内の多くの地域に共通のものであり、その改善のために市街地活性化の取組みが行われるようになって久しい。これまで様々な地域が、独自の資源や手法を取り入れて、活性化に取り組んできた。この流れは千葉県香取市にある佐原においても同様である。少子高齢化も進行するこの地においては、住民の主導で様々な活動が行われている。小江戸の風情を活かした景観まちづくりや、地域の女性が集まって企画される季節ごとのイベント、そして水郷を活かした舟運による観光事業など、多様な活動が存在する。このように、住民が主導で活動が行われ始めてから20年以上経過した。地域づくり活動を長期に維持することが困難になる地域も少なくないなかで、この地域では活動が継続され、また新たな活動団体が年々生まれているのは何故か。

そこで、佐原においては、風情のある小江戸の景観という魅力だけでなく、年に2回開催される山車祭りが、地域社会を構成する重要な要素の1つになっていることに注目した。佐原の大祭は、古くは江戸以前から現在に至るまで、住民が活動主体になって続けられており、町内会を初めとして商工会や行政などの諸アクターが連携を取り合って運営している。精神的な豊かさが叫ばれる現代にあって、地域社会においては、血縁や地縁の消失による弊害が表面化してきていると言われることが多いなかで、現在も住民主体の町内会組織が根ざしているこの地域には、祭りの存在が大きな影響力を持っているのではないか。そして、その影響が浸透した社会生活を住民が送っているからこそ、各種の活動団体がこの地域において萌芽し、維持されているように考えられる。

そのような問題意識から、現在も「血縁」「地縁」による人々の関係性が残っていると思われる佐原に焦点をあて、今日まで行われてきた祭りを歴史的に分析するとともに、今日の祭りの姿を多面的に捉えることで、現在の地域生活の真相に迫ることを、本稿の目的とする。

### (2) 論文構成

論文の研究目的として、

- 一、 佐原における社会構造の現在に至るまでの変容を、祭りの変容と関連づけ読み解く
  - 二、 現在の佐原の祭りの実像を明らかにして、地域社会と祭りの相関性を探る
- の二点を設定し、多様なデータを用いながらこの二点を実証していくこととする。

第1章では、祭と社会状況の関連性について歴史的背景（明治期から昭和前期における祭りの隆盛、高度経済成長期における祭りの全国的な衰退と、その後の再興）をベースに述べながら、松平誠の指摘した伝統的都市祭礼における価値の二面性、及び上野千鶴子の

「選択縁」「選択できない縁」という分析視座を踏まえる。ここで、佐原という地方都市社会の変容をとらえるために、戦後の地域社会についての潮流を理解する。そのうえで、本稿の視座として現在の佐原の祭りが、かつての目的志向的な祭りから、本来もつ地域帰属という価値が支配的な祭りへと変容しており、選択できる縁と選択できない縁の鑄直しによって帰属意識の構築が行われている。そしてその背景には、地域社会における民主化が存在することを仮説立てる。

続く第2章では、香取市及び佐原地区の現在の姿と、近世後期から現在にかけての歴史の変容について、祭り自体の移り変わりにも触れながら、佐原の祭りがそもそも、町内の階層を反映する目的のみならず、村落町内を包摂して共同体であることを確認し、商業の振興につなげるという目的を、もっていたことを明らかにする。そして、地方都市としての佐原の戦後は、高度経済成長下での地域産業縮小と祭りの変容・再興を中心に述べる。

第3章では佐原の祭りの地域組織に関する現状について、ヒアリングを元に実情を明らかにする。各町の組織構造や、運営における町内ごとの共通点や差異の詳細を中心に記述し、佐原の祭りの特徴を述べたうえで地縁・血縁・社縁といった各種の結びつきが町内組織の上に折り重なっている姿を、「選択縁」「選択できない縁」と照らし合わせて考察する。

ここまでの章をふまえて、第4章では、佐原の祭りをとりまく周縁の活動団体との関連性を分析する。そして、このように現在まで姿を変えて続けられてきた佐原の祭りの背後には、「戦後地方都市社会の民主化」の過程が存在することを、全国的な潮流と照らして、地域の産業構造の変遷や各種祭りの変化から読み解き、地方都市社会の戦後と現在の地域帰属の様相を明らかにする。

終章では、ここまで論文の内容について図式化しまとめるとともに、各種ヒアリングを通して聞かれた住民の声をふまえて、佐原の祭礼組織の今後を展望し、本稿の意義を明示する。地縁の祭りの再生と復興が問題になるのは都市化による地域共同体の解体と変容のあと、地縁が、人々によって共同性へのコミットによるアイデンティティの供給源として、再び意味を持ちうるのか、または持つ必要があるのか、という問い（上野、1984、pp.66）に対する一回答を、おわりに、において提示することを着地点として掲げる。

### （3）研究方法

日本の祭りに関する諸学説の文献での検討を行い、地方都市における産業構造の歴史的変遷をふまえたうえで、佐原地区の歴史・山車祭りの歴史に関して文献研究を行う。その素地に基づき、夏秋2回の山車祭りに参加するとともに、忠敬茶屋のご夫妻、町内の祭りの担い手の方々（新橋本・下新町・下川岸の当役の方々）・NPO佐原の大祭振興協議会のS氏親子、ボランティアスタッフの方々・株式会社ぶれきめらのN氏・行政該当課・各種地域活動団体へのヒアリングを行い、現在の実態を捉えて考察を行った。

## 第1章 祭の理論と本稿の視座

### 1-1 祭と社会状況の関連性

#### (1) 伝統的都市祭礼の本来的意義

本研究では、地域社会と祭りについて扱うが、芦田（2001）によれば、日本社会における祭りは、そもそも地域社会の維持を目的としていた。というのも、かつてのムラやマチの生活は、ひとつの小さな地域社会＝共同体の内部でおおむねまかなわれており、そうした時代にあっては、住民に全体的な相互関係性を確認させ、「われわれ」を意識させる祭りは、社会集団の存立にとって不可欠なものであった（芦田、2001、pp.30）。

そこで、日本の伝統的都市における神社祭礼の多くは、19世紀末から1920年代にかけて完成し、神社祭礼は最も華美で豪華な祝祭へと展開していった。この時期は、日本の地方自治の在り方が一応の完成をみた1888年の市制・町村制によって、国家の側からの官僚統制と行政からの除外という状況に対応して、地域社会の自営のために共同をつくりあげる時期でもあり、それまで長い間培われてきた伝統的な「内」なる生活共同の仕組みを完成させ、町内社会の内実をかためる時期でもあった（松平、1990、pp.30）。

このように、日本の資本主義が成長し、産業化による社会の変容がおこりつつあるこの時期に、伝統的都市の共同体においては地縁的結合が強化され、神社祭礼は最盛期を迎えるという複雑な構造が作り上げられていたのである。しかしながら、産業化の進展による地域社会構造の変化によって、町内の共同社会は観念的な共同へと変容せざるを得なくなった。

#### (2) 戦後の祭りを巡る展開

それゆえ、このように「最大の社会的機能が共同体の（再）確認にある」とされた日本における伝統的祭礼は、戦後復興から高度経済成長期にかけて全国的に衰退が顕著となった。これは、祭りの社会的基盤そのものである共同体自体の、崩壊が進んだことによるところが大きい。農村部では祭りの実働的な担い手であった若者層を中心に、多くの人びとがムラを離れて都会に移った。都市は都市で「職」と「住」の分離が進み、昔からの相対的に自律的なマチの生活が崩れていく。そして人びとは、それぞれ個別的な関心から高い所得と快適な私生活を目指したのである（芦田、2001、pp.31）。

しかし、それにも関わらず、1973年の第1次オイルショックあたりの、高度経済成長期の終焉を起点にして、都市の大規模な祭りを中心に、祭りは全国的に復興することとなった。「モノの時代からこころの時代へ」というフレーズが希求され、高度経済成長期に生み出された数々のひずみを是正する動きのなかに、祭りもまた含まれていたのである。失われかけていた伝統的祭礼が復活するばかりか、郊外のベッドタウンや祭りをもたなかった大都市においては新たな祭りが生み出された。

芦田によれば、このことは、非日常的な集合的沸騰と共同性や関係性への現代人の希求に裏付けされていると解釈できる。というのも、現代では、社会生活全体の維持と発展に

とっての諸条件は、その各々に応じて専門的に文化した諸集団・関係によって充足されているが、それとともに人びとの側でも、その生活を全面的に依存していた特定の集団から相対的に自立し、自己の個別的な目的に合わせて、複数の社会集団や社会関係に一時的、部分的、匿名的、表面的、選択的に関与するようになる（芦田、2001、pp.30-31）。

それゆえ、個人はいやおうなく自分自身の主観性にさらされ、自分が存在するために必要な意味と安定とを、そこから掴み取らなければならず、「まさしく人間の本来的な社会性の故に、これは非常に不本意な状況」となっている。このようなアイデンティティの危機の時代に生きる者は、規制の社会的文脈のなかで形成された社会的象徴体系にたいする信頼をなくしたときには、自分が何者であるかを確認するための聖なる象徴を自らさがさなければならないのである。ある者は、伝統的な祭礼の中で使用されているさまざまな聖なる象徴のなかに、新しい象徴的価値をみいだしたり、つけ加えたりすることによって、自己を位置づけようとする（森田、1990、第2章2節）。

そのようにして、自己の位置づけのための存在として、祭りは再び日本社会において重宝される存在と成り得た。今日では、伝統的な祭りも、イベントとしての「神なき祭り」も入り乱れて、各地で新たな祭りが生み出されている。ここまで述べてきたように祭りの盛衰には、日本社会の変容が反映されていると考えられる。それは、産業構造や制度の変化のみならず、時代に呼応した人間の精神世界の姿まで映しだしている。ゆえに、地域社会における祭りの姿の変容を詳細に読み解くことで、その背景にある産業構造に応じた、精神的結合の核心をつくことにもつながると言えよう。

## 1-2 松平誠、上野千鶴子による祭研究

前節で確認したように、社会構造を反映しながらその姿を変容させ、現代まで続いてきた祭りであるが、それについて都市社会学的な分析をおこない、現在まで祭りの研究において代表的論者となっている、松平誠及び上野千鶴子の祭り研究の視点について、本節では触れ、本稿の分析視角を検討する。

### (1) 祭りにおける価値の二面性

松平誠は、日本各地の祭りについて実証的研究を行い、商業町の祭りの歴史的変容を社会構造の変動と結びつけて分析したが、伝統的都市祭礼を「核となる伝統保持の共同組織をもって運用される生活共同の祝祭である」と特徴づけたうえで、それとは異なる目的にこそ価値がおかれていたことを明らかにした。彼によれば、伝統的都市祝祭には、意図的で構造的な社会的目的がおりこまれている。産業化の過程において、地域社会と国家の地方政策との間で、都市の階層的共同のうえにつくられた威信による支配という構造の、シンボルとして祭りが機能していた。伝統的都市祭礼は地域社会の共同認知を再確認するための最も重要な祝祭行事でありながら、同時に、地域の社会統合へむけての階層的な配慮をもって再編成された非常に意図的な社会行事でもあったのである（松平、1990、第4章

2節)。

その具体的事例として、松平は江戸の山王祭と神田祭を例にとり、その祭りの担い手であった「町内」とは土地持ち、あるいは家持ちの町人、つまり定められた税を支払うことができる限られた人々のみを指していたと指摘する。無税の貧乏人が「町内」に数えられない一方で、「町内」では富める商人たちが幅をきかせ、「町内」そして祭りの運営において、その影響力の大きさを誇示していた。(松平、2008、pp.16-17)

このことを鑑みると、伝統的都市祭礼は、国家政策による地方行政の在り方に対応して、「内」なる支配の関係を基礎として目的的に作りだされた社会的行事だった、と理解できる。伝統的都市祝祭には、地域における共同認知という祝祭の本質的機能とは別の、きわめて強い目的志向的な要素が含まれている。それは社会学の用語を用いて言い換えるならば、祝祭の過程そのものを「楽しみ」として充足するという、いわばコンサマトリー(自己充足的)な価値とは対極に位置する、インストゥルメンタル(手段の合理性にもとづく)な価値こそが支配的な行為となっていたのである(松平、1990、第4章2節)。

このように、社会変容期にその手段が目的となり展開した祭りであるが、戦後における再びの社会変容と共に伝統的祭礼としての姿を維持している祭りは現在では少なくなっている。しかし、佐原の祭りは、そのようななかでも町内会という地縁に基づいた組織が主体となって催され、伝統的祭礼として姿を今日まで存続させているため、本稿では松平の言う伝統的都市祭礼のメカニズムとの比較検討を行う。

## (2) 選択縁・選択できない縁の相互関係

近年は、よさこい祭りのような「選択縁」で結ばれた祭りが増加しており、祭り研究において「選択縁」で結ばれた祭りに関心が集まっている。この「選択縁」という捉え方は上野千鶴子(1984)によるものであるが、彼女は、都市の祭りをとらえる際に、血縁・地縁・社縁のいずれもが外在的で拘束力を持った「選べない関係」であるとして、選択できない縁として定義づけ、その何れにも属さず、拘束性をもたない「選べる関係」を選択縁と定義づけた。そして、血縁と地縁のような選択できない縁だけから成る拘束的な伝統社会における、選択縁の契機こそが祭りであり、血縁・地縁・社縁共同体というすべての共同体に共通する祭りのメカニズムは、「選べない関係」を「選べる関係」へと作り直すことで、集団帰属を再確認する手続きであると指摘する。以下は、そのような鑄直し作用に関しての彼女の論の引用である。(上野、1984、chapter2)

今日では、血縁という相互に「選べない関係」を除いて、地縁も社縁も移動によって「選べる関係」へと変質しているが、その中でも地縁の祭りと社縁の祭りが要請されるのは、「選べる関係」を「選べない関係」へと転化することで安定化させるためである。「選べる関係」と「選べない関係」の方向が逆転していても両者に共通しているのは、相互転化のメカニズムを通じて、所与の関係が特権的な「選ばれた関係」へと、



シンボリックに変容していることである。集団帰属は、それが「選ばれた関係」であることによって始めて、人々に自覚的なアイデンティティを供給することができる。集団帰属が強制力をまったくもたない選択縁の領域では、この「選ばれた関係」の特権性があらわになる（上野、1984、pp.62-63）。

1節で述べたように、都市化にともなって、血縁・地縁・社縁という「選べない縁」の原理による、共同と組織化を前提とする集団の帰属意識というものは衰退しつつある。しかしながら、「選べる縁」の原理によって、共通の関心や目的をもった人々が、特定の時間と空間の中で、特定の生活様式をもって「場」を形成する。この意味では、最近の都市の祭りでは、集団帰属の「選択」によって、アイデンティティの獲得という機能をはたすことで、「選べない縁」から「選べる縁」へと铸直す契機となっているのである（阿久津、2000、pp.168）。そして、獲得されたアイデンティティは、祭りの組織に組み込まれる過程で、集団帰属の特権性を強めていく。このように、選べる縁と選べない縁が相互に関係しあうなかで集団帰属が再獲得されているという視座は、今日の佐原の祭りを捉えるうえで比較検討すべき視座であるといえよう。

### 1-3 戦後における地域社会の民主化

佐原町内における社会変容を読み解くうえでの手がかりとして、本節では戦前から戦後にかけての地域社会の変容の全国的な潮流を捉える。

#### （1）戦前の日本社会における階層構造

日本の近代化は明治維新に始まったとされているが、昭和期の戦時体制に突入する頃までの近代日本の社会は、農家や自営商工業主を主な構成員としていた。そのような構成のもとでは、家や村・町が基盤となって、運命共同体的な社会が形成されていた。そこにおいては、成員のなかに身分的な上下があり、社会的な拘束がつよく、支配従属の関係が生まれると同時に、相互扶助も行われやすかった。農業集落を例にとれば、大多数の村には地主がおり、地主に対して小作人はいつでも小作地をとりあげられるという弱い立場にあった。こうして地主は親方旦那衆として、農村社会の小支配層たりえた。このような階層構造は農村における地主小作関係ばかりでなく、小商工業者で構成された都市においても、旦那と丁稚・奉公や工場主と労働者のような関係性として保持されていた。それゆえ、特に町内の付祭りにおいては前述のように、このような階層構造を反映する目的が含められていた（福武、1981、pp.5-6、第1部）。

#### （2）階層基盤の崩壊

しかし、前述の社会構成は大戦期を経て、戦後には大きな変容を迎えることとなった。「日本の国家機構においては、戦後の改革によって、地方自治が重視されるようになり、国家

の完全な手足にすぎなかった地方自治体に、かなり広範な自治機能が与えられた、画一的な国家の強制は制止され、自治体における民主的発議が可能となって、地方にも民主化の空気が吹き込まれた（福武、1981、pp.76）。」そして、社会構成においては、農業構造の変化と産業化・都市化の進展・雇用労働の変化の結果として、近代日本の社会を制約していた村落と都市のいずれにおいても、旧来の階級支配の基盤が瓦解していくこととなった。

まず、村落社会についていえば、耕地の半数が小作地であり地主制による農業の支配が行われている、という戦前の日本農業の特質が、戦後の農地改革によって解放されることとなった。その結果、農家は少数の専業農家と多数の兼業農家に分解し、農村に住む非農家や非農家の集落への変容が起きた。このような構造変化にともない、村落はかつてのような共同体的な小地域社会ではなくなった。それゆえに過去の村落がもっていた階層中心社会が、地主制の崩壊と共に徐々に消滅の途を辿ることとなった（福武、1981、第2部3節）。

そして、産業化の展開が、第一次産業の著しい比重の低下と、それに呼応する第二次、第三次産業の比率の増加をもたらしたことにより、日本の社会は自営業主体の社会から雇用者主体の社会に転換した。このような背景を元に、都市においては、1960年までに急速に都市化が進んだ後の、高度経済成長による急成長によって、その構造が変化した。都市住民として新中間層や労働者が多くなるにつれて、商業自営層の展望は小さくなった。都市の中に混在してきた家内工業的な零細工場も少なくなり、残存している工場の先行きも不安に満ちたものとなるなかで、商工自営業主たちの町における支配力は、戦前に比べて著しく弱まった。それゆえに、戦前の共同体における階層的な社会構造の維持はその存立基盤を失い、農村のみならず都市においても困難となった（福武、1981、pp.127）。

### （3）地域社会の再編成と民主化の浸透

前述のように、高度経済成長と共に全般的な都市化が進むと、商品経済の拡大によって都市は農村を凌駕し、住民生活のなかに都市的生活様式が定着・深化した。都市社会の住民組織においては、慣行的運営から規約に基づき選挙で選出された役員による、民主的組織運営がなされるようになる。その一方で、農村社会では人口流出や在住人口の村落外への就労者が増加し、共同体の空洞化がおりつつも、都市的生活様式が定着していった。（中川、1996、第5節）

このようななかで、オイルショック後の低成長期には、日本社会が都市型社会段階に移行すると、支配層の階級的利益を保障する体制的秩序の維持が困難を極めた。そのようななかで、住民の人間的必要・欲求に基づく社会的活動が、地域において多様かつ重層的に展開されるようになると、住民組織は階級制を下支えしていた段階から、住民主体の民主主義が展開されるものへと、その性格を変化させた。（中川、1996、第6節）

ここまでの地域における階層社会から民主的な社会への変容という過程は、全国的な流れであり、戦後の佐原の変容もまた、この潮流に乗っていたのではないかと考えられる。

そこで、本節でふまえた変容過程が佐原社会にも当てはまるものであるのか、4章の2節で考察を行うこととする。

#### 1-4 本稿の視座

ここまですまえて本稿では、現在の佐原の祭りにおいては、祭りの過程そのものを「楽しみ」として充足するという、コンサマトリー（自己充足的）な価値が支配的となっており、本質的な地域社会統合の機能を果たす、という祭り本来の姿を呈していると仮説立て、佐原の祭りについて研究する。地域の社会構成が変容していくなかで、祭りの場においては、本来もっていた商業振興と階層的構造の確認というインストゥルメンタルな価値は消失した。その一方で、現在では地縁という選べない縁が母体である町内組織において、選べない縁と選べる縁的な祭りの参加者の相互関係によって、地域への帰属が強固なものになり、かつてのそれとは異なったコンサマトリーな価値をもつ祭りの姿が形作られている。そして、このような変容の背景には、地域産業と経済の構造変化にともなった、町内社会の民主化とも呼べる現象が起きていると考えられるのではないか。そこで、このような仮説のもとに、祭りの背景にある佐原社会の変容と関連付け、実証的に研究することを本稿の目的とする。以下に仮説を整理し、それに対応する章を並べる。

(1) 佐原の祭りはかつて、商業振興と階層の確認というインストゥルメンタルな価値が支配的だった。(手段の目的化) ⇒2章

(2) しかし、現在の祭りでは、選択縁、選択できない縁の相互関係によって、地域帰属が強固なものになっている ⇒3章

(3) ゆえに、祭りの過程そのものを「楽しみ」とし、地域帰属の確認をなすという、自己充足的な祭り本来の姿をみせるようになっている。そして、この変容の背景には地方都市の民主化の過程があった。⇒4章

## 第2章 佐原と祭りの歴史

### 2-1 佐原地区の現在の地域特性（地理・人口・産業）



図1 香取市の位置  
(香取市 HP より抜粋)



図2 水郷佐原の重要伝統的建築物群保存地区（香取市  
商工観光課 HP より抜粋）

佐原地区はそもそも、1889年の町村制施行により佐原町という行政区が生まれ、1951年に香取町・東大戸村・香西村との合併により佐原市となった。それ以降、2006年までは、佐原市という行政区が続き、2006年に小見川町、山田町、栗源町の3町と合併して、香取市に含まれることとなった。本稿では旧佐原市エリアを佐原地区と称し、なかでも山車祭りの行われる本宿・新宿に焦点をあてながら、考察を行う。

現在の香取市の面積は262.31 km<sup>2</sup>、総人口は83,595人である。千葉県の北東部にあり、北部は利根川を挟み茨城県と接している。東京から70km圏、千葉市からは50km圏にあり、佐原駅は、東京駅からは高速バスで90分、成田駅からJR成田線で30分の距離にある。香取市北部の利根川の流域には水田地帯が広がり、古くから水郷の早場米産地として、首都圏の食糧生産地の役割を担う「米どころ」となっている。米の出荷量は県内1位であり、また、食用甘しょは生産・販売額全国一を誇ることからわかるように、農業が基幹産業となっている。

香取市の高齢化率は2007年には25.3%と、市の人口の4分の1を占めており、2017年には33.3%まで上昇することが予想されている<sup>1</sup>。また、若者世代の人口減少が特に進んでいることもあり、出生率は減少傾向にある。このように、少子高齢化が年々深刻化している地域である。

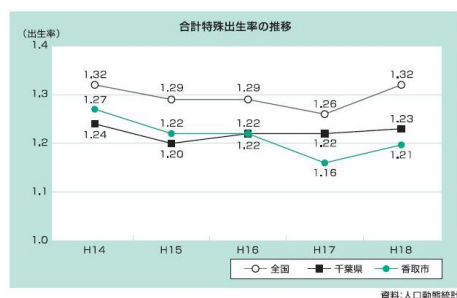


図3 合計特殊出生率の推移（香取市 HP より抜粋）

<sup>1</sup> 香取市『香取市総合計画 基本構想・前期基本計画 平成20～29年度』

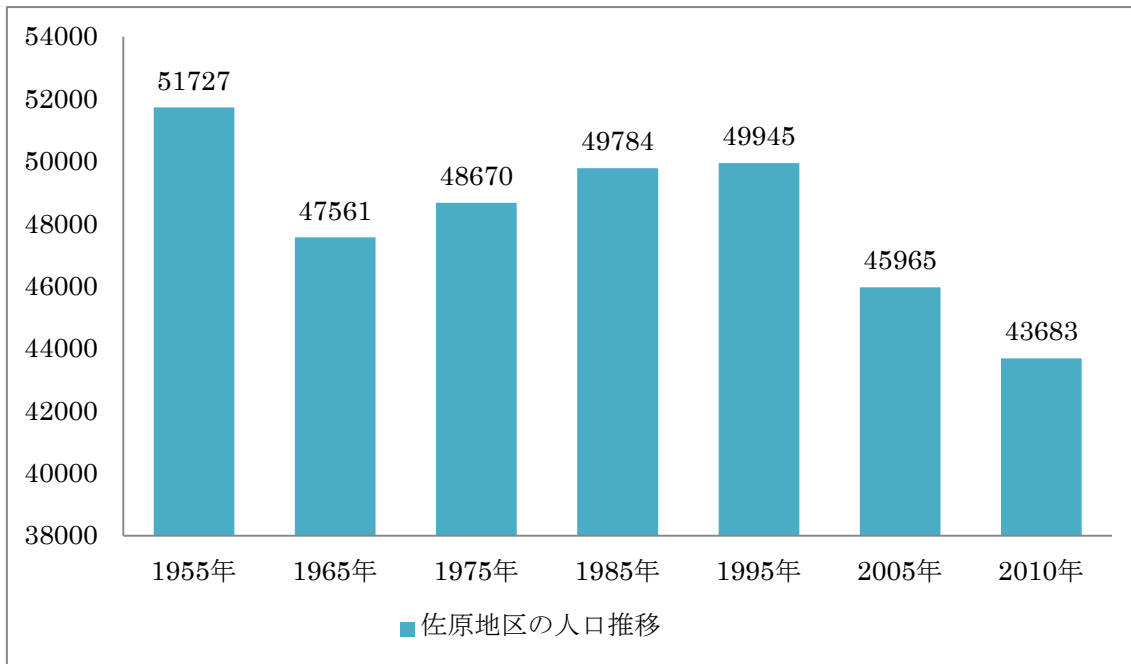


図4 佐原市統計書を元に筆者作図

佐原地区に限った人口の推移は上図の通りになっている。1955年から1965年にかけて、人口は大きく減少しているが、これは戦後の日本経済の進展に伴って都市への人口集中の影響を受けてのことである。その後は徐々に増加の途を辿ってきたが、ここ15年前後に急速に人口が減少していることがわかる。

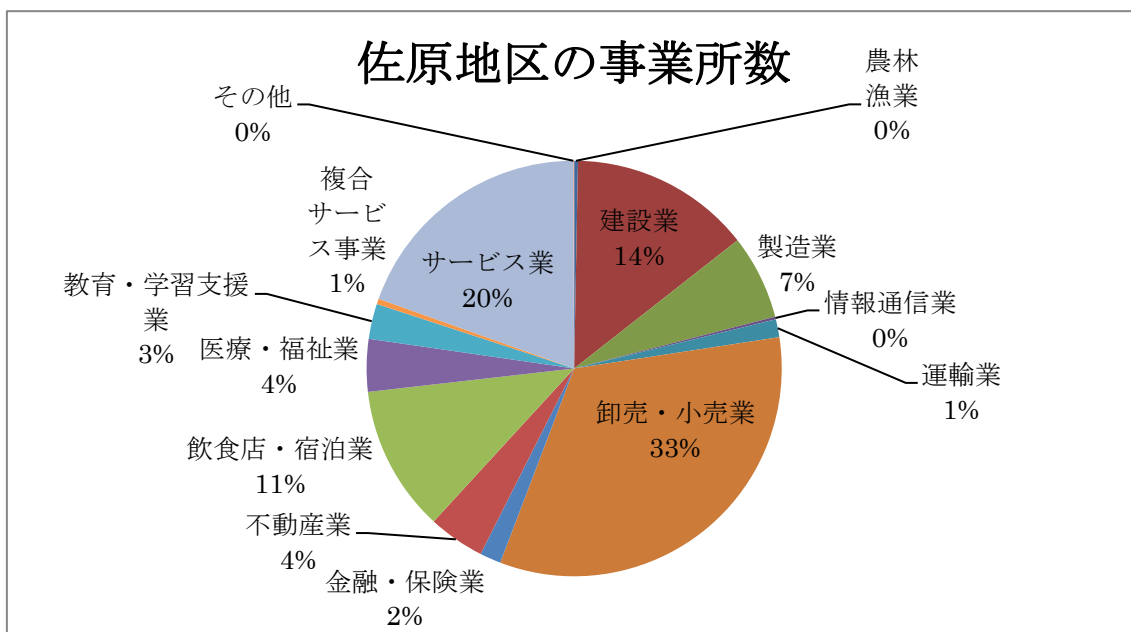


図5 『平成16年度香取市統計書』より筆者作図

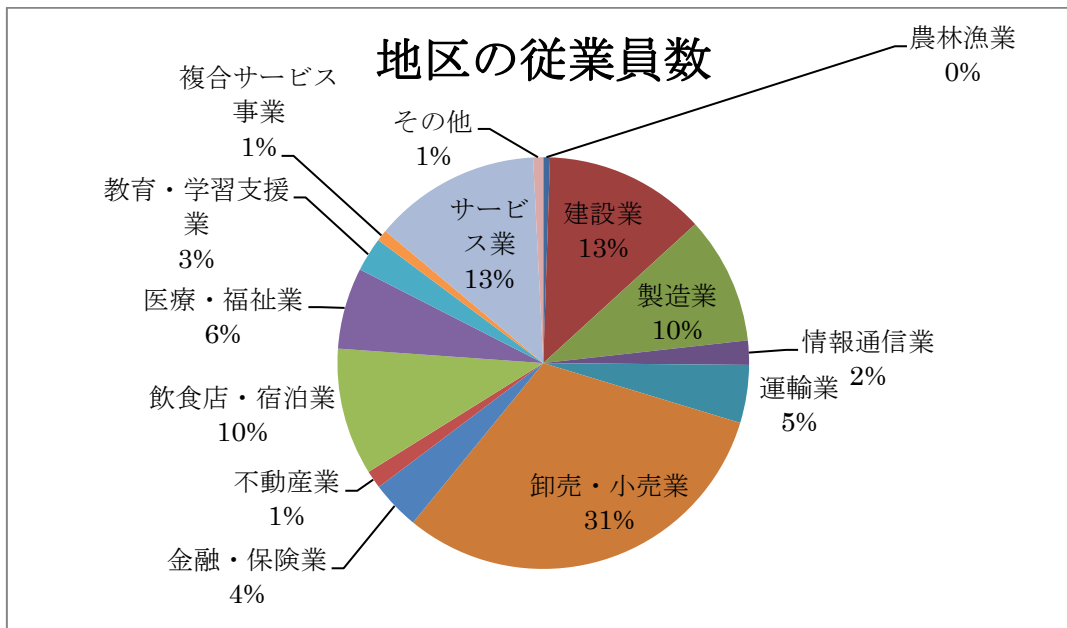


図 6『平成 16 年度香取市統計書』より筆者作図

佐原地区単独での事業所数、従業員数は上記の図のようになっており、事業所数、従業員数ともに、卸売・小売業が基幹産業となっている。香取市としては農業が基幹産業になっているものの、佐原地区の産業においては農業の比重は非常に軽いものとなっている。

## 2-2 戦前の佐原と祭り

### (1) 農村集落期

戦前の佐原と祭りの歩みを、この節では確認する。現在の佐原の地域は、中世以前には香取神宮を起点にして開発が進められてきた。香取神宮は鹿島神宮とともに、大和朝廷の東国支配の重要な役割を担っており、佐原はその社領の1つとして、「香取の海」と呼ばれた内海と小野川の間でできた砂洲上に、集落を古代から中世期にかけて発展させた。鎌倉初期には佐原村の開発がすすみ、末期から南北朝期にかけて、単なる農村集落とは性格を異にしていた。というのも、「香取の海」には、海夫と呼ばれる漁業や水上交通に従事する人々が居住する津が70以上あり、佐原もその一つであったため、津を利用した商工業活動が盛んになる機運があったのである。このように、古代から中世にかけての佐原は農村集落的な商業活動を展開していたと考えられる（佐原市教育委員会、2000、pp.4-5）。

### (2) 河港商業都市期

戦国末期になると、佐原は香取社領としての農村的集落から、町場としての都市的集落への変容を迎える。これは、利根川の瀬替え工事により、佐原が利根川を通じて上下流域の沿岸地域および江戸まで舟運によってつながり、経済的に繁栄したことによる。1580年には新宿が開墾されたと伝えられており、1690年になると、幕府により年貢米の津出し河

岸として公認を受け、六斎市も盛んになる。利根川の舟運を基盤として、江戸と結びついた商品流通機構が整備された。享保年間には、小野川を中心として有力者により商業が発展し、蔵方と呼ばれる人足も多数いた。本宿 11 町内、新宿 14 町内の記録があり、この時期にはほぼ現状の町内組織の基盤が出来あがった（佐原市教育委員会、2000、第 1 章 2 節）。

### （3）祭礼の萌芽と展開

このような流れのなかで、有力者が町内の蔵方をねぎらうために祭りを行ったのが、祭りのはじまりであるとされており、山車の起こりも蔵方たちの遊びに端を発するといわれている<sup>2</sup>。山車祭りは町内にある、八坂神社と諏訪神社の祭礼の付祭りとして萌芽し、当初は神輿渡御の付属の行事と認識されていた。佐原村は利根川水運の発達・流域の新田開発による米穀の集散・醸造業の勃興により大きく発展したが、このような経済状況を背景に、江戸中期になると富裕町人が祭りのパトロンになり、町内ごとに山車を作るようになった。取引先であり文化の交流も頻繁に行っていた、江戸の山車祭礼文化の影響を受けて、新興の町でも古町に負けまいと山車をもつようになったことで、祭りが華美で大規模なものへ変化した。本宿では六月、新宿では八月に惣町の集会である惣町参会が行われ、名主・組頭の村役人と百姓代・町代によって構成されたこの集会において、祭りについて協議が行われて、その年山車を曳くか、曳かないかを多数決で決定していた。

この頃の佐原では、水運業で富を蓄えた商家、周辺の穀倉地帯からの米を原料に栄えた醸造家、豪農地主が「旦那衆」と呼ばれ、町内社会は彼らを中心として成り立っていた。彼らは、土地家屋の所有、商工業者であれば、間口間数と店舗の位置、年間所得、家系・家柄、町内居住年数、町内役職やその経験などの評価に基づいて、「株」と呼ばれる町内における序列関係が決定され、その序列関係に従った「株割り」に基づいて、町内費や祭りの費用分担していた。そして、彼らは祭りの場において、自ら山車を曳き廻すことはなく、財政的には、彼らの存在なしには祭りが存在しえないほどの大部分を負担するにもかかわらず、付祭りにおいては責任役や指揮役・監督役にとどまっていた。実際に山車の曳き廻しを行う若連は当時の町内の鳶職や裏町の小商人、職人衆であり、彼らは旦那方に良い見せ場をつくりつつ曳き廻しを行っていたという。このように佐原においても、祭りには、町内の旦那衆と呼ばれた存在と他住民らにとって、町内の階層を確認する目的が折り込まれていた（林、1998、pp.212-235）。

しかし、ここで留意しておくべきは、佐原の祭りが町内における階層確認のみならず、近農を取り込んで商業振興を行うことをも、目的としていた祭りでもあったことである。前述の通り、この頃の中心産業は酒醸造業であったが、これは周辺農村、穀倉地帯の作物ありきで成立していたと同時に、近農は重要な顧客でもあった。それゆえ、佐原においては、商業を中心とする町内の祭りでありながら、本宿における夏祭りが豊作祈願の意味をもち、新宿における秋祭りが収穫感謝の意味をもっていた。そのため、付祭りとしての山

<sup>2</sup> 佐原市教育委員会『佐原山車祭調査報告書』2001

車の曳き廻しは、その年の農作物の豊凶に左右され、現在のように毎年行われたことはほとんどなかった。近隣農村には、商業の基盤のみならず、佐原の町の人々の日々の生活、特に毎日の食事においては、周辺地域からの行商に負うところも大きかった。この時期の、多種多様な商売が成り立つ佐原において、その台所を支えていたのが周辺農村からの行商や振売り、引売りの商人だったのである<sup>3</sup>。それゆえに、収穫の出来不出来によって祭りの可否は左右され、近農を取り込んでの商業振興という明確な目的のもとで行われていた<sup>4</sup>。

また、この祭りは周辺の農村地域を包摂して、地域共同を強めるという祭り本来の姿も勿論持っていた。佐原の山車祭りは、山車の曳き手と山車の上で囃す人で構成されており、この囃子のことを下座と呼ぶ。囃子には町内の者は加わらないという決まりが、第2次世界大戦頃までは強く意識されており、それまでは町内の山車に周辺農村の若者が乗って囃すのが通例であった。下座連は農村部の人たちにとっての娯楽であり、技を磨いて佐原の山車に乗ることは彼らにとっての誇りでもあった。そして、下座連に属す人びとと商売などを通じて緊密な人間関係をつくっていた佐原の町内の人びともまた、下座連に対して日頃から親しみを感じてきた。このような基盤があって、下座連に属す人びとは各家の後継者となる長男たちがその技を伝習していき<sup>5</sup>、佐原の町内と農村を包摂して、地域共同体としての共属の確認の効果を発揮していたと考えられる。

#### (4) 地域拠点商業期

1839年になると佐原の酒造の株仲間27人のうち、半数以上の14人が新興商人となり、新旧の交代が進んだが、これ以降にも酒造・醸造家における新旧の交代は頻繁に起こっていた。明治期には徳川幕府の支配から明治新政府へ管轄が移るが、それ以降も県内有数の商業都市として発展は続き、その商圏は成田市や鹿嶋市まで半径30kmに及び、商圏人口は30万人とも言われた。しかしながら、1898年に成田鉄道（現JR成田線）が佐原まで開通すると、これとともに陸上交通も整備されていき、利根川を起点とする水運業は衰退していく。このように、明治時代末期から昭和時代前期にかけては、河港商業や醸造業が衰退していく一方で、地域の物産の集散地として、また地域の中心都市として、農業基盤に支えられた時代を迎えた。現存している1910年の佐原町番付には、横綱や大関といった称号が各人に割り振られており、新旧の交代が起こりやすい佐原商家における階層確認の様子が読み取れる。

その一方で、町人の自己負担で始まった祭りは、1909年に電燈線が張られても、祭礼への影響を防ぐために電線を引き上げ、引き上げ箇所は当該町が負担することで大人形の山車祭りが保持された。全国的には、電線が張られるようになると、山車祭礼は終焉するか、

<sup>3</sup>小林裕美『佐原のシンノミ畑』国立歴史民俗博物館研究報告、2005

<sup>4</sup>大豆生田稔『佐原の歴史3号 幕末維新期の佐原』佐原市教育委員会、2003

<sup>5</sup>佐原市教育委員会『佐原山車祭調査報告書』2001



神輿渡御に変わることが多いなかで、このことは、新旧の交代が頻繁におこる佐原社会において、階層確認の目的をもつ祭りが代替不可能なものであったことを意味していると考えられる。

しかし、幕末と明治末の佐原の賑わいの比較を行った伊藤泰歳は、明治末期の佐原は表面的にはあたかも繁盛しているかのようだが、実際は年々衰退に向かっていると著書上の随所にほめかした。彼は、昔の祭りは「商略で繁栄策であった」と回想し、祭りを盛大におこなって汽車の割引や新聞への広告を実施すべきだと、祭りによる町おこしを提案している<sup>6</sup>。これは商業振興という祭りの目的の一つが町内において、かつてほど明確に意識されなくなっていたことの表れであり、河港商業都市期の祭りの構造とは徐々に変容していたことがわかる。

## 2-3 戦後の地域と祭りの変容

### (1) 戦後の地域変容

江戸期から昭和初期にかけて、利根川の舟運によって商業都市として繁栄した佐原だが、陸上交通機関が整備されると、徐々に商圈としての求心力を失っていった。1951年には佐原町、香取町、東大戸村、香西村が合併し佐原市が発足し、1955年には瑞穂村、新島村、津宮村、大倉村が佐原市に編入する。佐原は近郊の中心地区として、15万人の商圈となって1960年代頃までは近郊の中心地区として商店街も賑わいを保ち、近農地域も居住空間へと転用が相次いだ。しかし、1978年に成田空港が開設されると、佐原の中心市街地は衰退に向かうこととなった。1990年以降は、モータリゼーションの進展や、周辺市町村への郊外型大型スーパーマーケットの進出で、客足が減少し、佐原は商圈としての求心力を失い、駅前にあった2軒のデパートも閉店を余儀なくされ、商業中心地としての佐原の活性化は困難となる。このように佐原もまた、人口流出・商業衰退など高度経済成長の地方都市に及ぼす影響を受けていたと言える。

### (2) 戦後における祭りの変化

地域の経済が下火になる一方で、戦時期にはほぼ中止された山車曳きまわしであったが、新宿では戦争直後の1945年に例祭が行われ、かなりの山車が曳きだされた。1946年には新宿で15台、本宿でも11台と、それ以降は隆盛を辿る。しかしながら、戦後の佐原の祭りの歩みはそれまでとは大きく異なっていた。戦前、とくに明治中期までは佐原地区の経済的な繁栄の表出の場としての意味合いを強く持ち、商業振興という明確な目的のもとで佐原の祭りは行われてきた。しかし、戦後において佐原の経済は、前述の通り下り坂を辿っており、目的や資金の面で、それまでと同様には祭りを維持していくことが出来なくなっていた。それゆえ、高度経済成長期前後から、そのあり方は徐々に変容した。

まず、山車の巡行方法に変化が生じた。一定の曳き廻しコースを定めず、それぞれ自町

<sup>6</sup>大豆生田稔『佐原の歴史3号 幕末維新时期の佐原』佐原市教育委員会、2003

内を中心に「佐原囃子」の調べに乗せて曳き廻す、「乱曳き」と呼ばれる曳き方が佐原の祭りの基本形式である。その際、現在では乱曳きの途中で祝儀（美羅と呼ばれる）を受けると、御礼として家の前で山車を止めて手踊りを披露する。そのため、手踊りを披露するために山車を止めることが頻繁にある。しかし、かつては大通りや川沿いなど一定の場所でのみ手踊りを披露し、その他の場所では止まらず曳き廻すのが通例であったという。これは、祭りを運営するにあたって必要な資金を調達するうえで、町内の豪商・旦那衆をあてにすることが、商業の衰退とともに困難になったため、運営資金を町内の一般住民にもらい歩くことが、祭り運営において必要不可欠となったことを意味している。そして、そのように貴重な寄付金に対する感謝を表す手踊りを行うことで、寄付者の帰属意識を高めている。

また、山車の曳き手にも変化が生じた。現在の佐原の山車の曳き手は、子どもや女性から青年男性まで多様だが、15～20歳程の一般女性は、かつては山車曳きに参加していなかった。その代わり、昭和20年代後半あたりまでは、芸者にお金を払って祭に参加し、踊りを披露してもらっていた。しかしながら、佐原経済の低迷と共に町に芸者がいなくなると、地元の若い女性たちが参加するようになり、現在では地元住民である女性たちやその関係者がこぞって参加して、山車を曳き手踊りを披露している。それゆえ、手踊りの振付けにおいても戦前は日本舞踊が徹底されていたが、戦後はそれが簡略化され、バブル期に流行したディスコでの踊りの様式も混ぜ合わされたものが現在では披露されている。

上記二点は、徐々に移り変わっていったため、年代上のどの時点ではっきり変容したと特定することは出来ないが、戦後の佐原社会における産業の低迷に抗うように変容を遂げつつ、現在まで祭りが続いてきたと言える。その過程においては、これまでの祭りとは異質な要素の取込みや、旧来の在り方の捨象も積極的に行われた。一見すると伝統の喪失であるようにも見えるそれらだが、佐原の祭りが高度経済成長期を経ても失われずに、今なお年2回、地縁組織を基盤として開催されていることを踏まえれば、単なる伝統の消失とは異なる意味を持っていると考えられる。

#### 2-4 大祭の再興と、住民活動の勃興

前節で触れたように祭りが時代に合わせて変貌を遂げていく一方で、1980年代後半頃には、かつてのように広域的な商業振興を目的とする祭りではなく、佐原地区の一部の住民のみが楽しむ閉鎖的な祭りとなっていた。それゆえ、維持管理に費用がかかる古い町並み、周辺の排水やゴミが流れ込む小野川と並んで、「佐原の三悪」と称され、祭りに参加しない住民からは、酒と喧嘩の祭りとして疎まれる対象にもなりつつあった。このようななかで、「きちがい」と呼ばれるほどに祭り好きであり、かつ衰退しつつあった佐原を盛り上げたいと考える少数の人々が、この祭りという地域資源に改めて注目した。そして、この祭りを外部へと積極的にアピールすることで、佐原の商業振興につなげようと始まったのが、佐原の大祭の振興活動である（白井ら、2009、pp.96）。

商業振興のための祭りの復興、という考え方を地域に浸透させるために、佐原の大祭関係者は「自分たちが楽しむための祭り」から「見せるための祭り」へと、フレームを転換させる必要を感じていた。しかし、その際には、祭りの主体となる市民からの合意の獲得と、大祭への強力に消極的な佐原市役所の支援の獲得という2つの課題が存在した。そこで、大祭関係者は、大祭の歴史に関する古文書の読解に尽力し、両者との議論に向けた準備を行なった。その過程で、大祭が商業振興の手段として長らく活用されていたという記載を発見し、このことを切り札に両者の説得を行なった。度重なる市民との対話集会や市長への説得が功を奏し、両者を活動の積極的な協力者へと変容させることに成功した（白井ら、2009、pp.96）。

このように、ソフト面における祭りに対する意識改革と並行して、祭りの環境整備というハードの面においても、多様な取り組みが行われた。まず、祭礼中の交通渋滞の解消のために、利根川の河川敷に臨時駐車場を用意し、そこから祭りの会場近くまで観光客を輸送するために、小野川の清掃をおこなって舟運を再開させた。また、1991年には文化会館前広場に観覧席が設けられ、新宿全町の山車が横に連なってサンギリの演奏や若衆の総踊り、そして各種曳き廻しが行われた。この観覧席は盛況を呈し、翌年には有料化されることとなる。

このような観光化の機運の高まりは住民たちにも伝播し、町内ではこぞって山車の新規造立が行われた。このことは町内住民層における祭りの伝統性の再発見にもつながった。「見せる」祭りという意識の高まりは、それぞれの山車の彫刻や人形に目を向けさせ、この時期以来、人形や彫刻についても粗雑に扱うのではなく、丁寧に修繕・保管されるようになったという。それまで町内間の競い合いにおいては、もっぱら山車の曳き廻しの技法において優劣が比較されていたが、現在では、「我が町内の人形は佐原一の美男子である」「最も古い山車をもっているのはウチ」というような、人形や彫刻、そして山車そのものにまつわる美談でも競い合いがなされるほどになっている。

その後、1993年からは、祭礼期間中にはお祭りステージを祭礼地区の中心部に設置して、町内若連による手踊りや下座連による演奏・近隣地域の神楽が披露されるようになった。さらに、1997年には本宿の祭礼日を7月10日過ぎの金、土、日への改正を行い、これらの活動が功を奏し、祭りの入込み客数は活動前の6倍近くに及ぶこととなった。1994年に東京大学教養学部が行った調査報告書からは、「昔は若衆が荒っぽく、当役もしきたりを重んじていたが、最近はそんな以前に比べて静かになったと思う」という町民の声が伺える。1994年は、町外からの観客数が圧倒的に増加し始めている時期であり（下図参照）、このような観客の増加は町内の担い手たちの「見られている」という意識を確固たるものとしていったのではないかと考えられる。

活動が深まりをみせつつあった1996年の『佐原市市民意識調査』によれば、佐原市のイメージとして活用していきたいものという問いに対し、「山車祭り・伝統行事」が46.0%と最も高い半数弱のパーセンテージをあげている。ここで注目すべきは20～29歳の60.1%も

の割合の人が、「山車祭り・伝統行事」と回答していることであり、これは若連や女性として実際に祭りに出ている層のボリュームゾーンであることから、地域の若者にとっても祭りが極めてシンボリックな意味を持っていることがわかる。

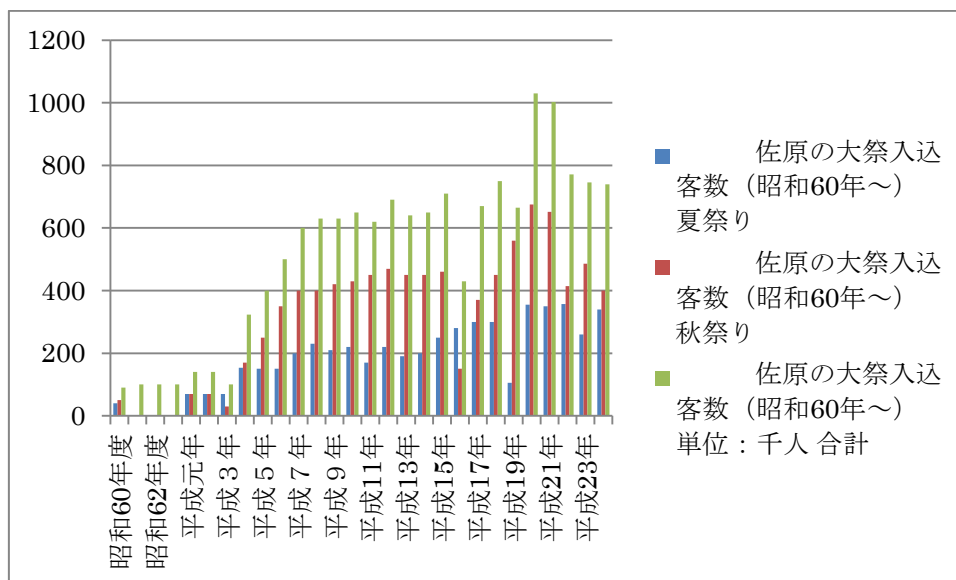


図7 佐原の祭り入込客数の変動 (香取市のデータを元に筆者作図)

このように、佐原においては祭りの環境整備がまちづくりの促進と偶然にも同義（白井ら、2009、pp.100）であった。この時期には、祭り再興の流れと並行して、町並み保存の活動も深化した。これらの活動の相乗効果によって、佐原地域の観光客数は大きく増えると共に、新たな活動も生まれることとなった。

ここまでの歴史的な流れを祭りに関して整理すると、現在の町内の原型が形作られた戦国末期頃から江戸期にかけて、佐原における祭りは萌芽した。舟運によって佐原町内が繁栄する過程で町内と周辺農村を包摂した商業振興としての目的、そして商業町としての町内社会の階層の反映という目的をもって拡大・華美化した。そこでは、地域帰属という祭りの本来の価値のみならず、商業振興と階層の確認というインストゥルメンタルな価値が支配的だったと推察される。

その後、陸上交通機関が整備されて舟運が衰え、佐原が地域における拠点商業地としての立ち位置に移行しても、祭りは衰えることなく続けられた。しかしながら、その過程では、本来もっていた階層の確認と商業振興のための祭りという側面は徐々に薄れ、町内住民が中心となって楽しむ祭りに変容しつつあった。この変容は、佐原の祭りにおいてインストゥルメンタルな価値から、コンサマトリーな価値へと徐々に重心が移動していったことを意味していると考えられる。戦後には高度経済成長と都市化を経て人口や産業構造、そして地域社会の構造もまた変化する中で、この移動がより顕著なものになった。

期分け	河港商業期	地域拠点商業期	商業停滞期
年代	戦国末期～ 明治初期	明治中期～ 昭和初期	昭和中期～現在
山車祭り資金源	旦那衆中心	旦那衆中心 (新旧の交代盛ん)	地域の一般住民
山車祭りの様相	萌芽 華美化、 大規模化	祭りの基盤の 整備（山車曳き廻し規約の完 成）	住民だけで楽しむ閉 鎖的な祭り 担い手の多様化
祭りの目的	商業振興 階層確認 共属確認	階層確認 共属確認	共属確認

図8 地区と祭りの歴史的変遷とその分析

### 第3章 佐原の山車祭りの実像

本節では、これまでの祭りの歴史的変容をふまえたうえで、現在の佐原の山車祭りの姿を明らかにする。ヒアリング調査に基づき町内組織について分析したうえで、祭りにおいてはどのような縁の関係性が見られるのか検討する。

#### 3-1 祭りの組織

佐原では、7月に本宿の八坂神社の例祭が行われ、10月には新宿の諏訪神社の例祭が行われる。この付祭りとして、それぞれの町内が独自の飾りつけをした山車の祭りが行われる。夏祭りは八坂神社の祇園祭りで、江戸時代の旧佐原村のほぼ中央を流れる小野川右岸、すなわち本宿と称される地域の氏子であり、山車持ちである各町内から山車が10台繰り出され、佐原の区域を方々に競い合って曳き廻される。秋祭りは諏訪神社の大祭であり、小野川左岸の新宿と称される氏子区域の町内から山車14台が揃い、同地区を曳き廻される。山車行事と神社の年中行事ではそれぞれ受け持つ会に違いがあるが（下図参照）、本稿では、町内が主体となって運営されている付祭りについて中心として考察を行うため、例祭の詳細については割愛する。

図9 祭礼組織の概要

行事		山車行事	神社の年中行事
主体		氏子会会員の山車持ち町内会	氏子会
当番の呼び名	本宿	山車年番	惣町年番
	新宿	幣台年番	年番幹事
期間		3年	1年

#### 3-2 町内の実態

##### (1) 町内の役職

祭りのメインである山車の曳き廻しは、地区の各町内が、それぞれ主体的に執り行っている。町内会における基本的な役職としては、区長、区長代理、会計、相談役、協議員、古役、当役、若連（若衆）がある。このなかでも当役と若連が祭りの中心的な担い手であるが、町内会組織のなかの祭事役員として、祭り専従の役職を設ける町内があったり、古役を設けていない町内があったりと、各町内によって細部は少々異なる。

当役は40歳前後からそれ以上の年齢の男性で構成されている。山車運営についての直接の責任者であり、山車どうしの交渉を担うのが、祭りの場での主な業務である。祭りの準備・計画・進行も当役の職務であり、当役の中の責任者が当役長という。当役長は、2～3年で次の者に替わるのが通例である。当役を終えた人は、古役と呼ばれる。若連（若衆）は18～40歳前後の青年男性で構成されており、山車曳きの主役を担う。若連の責任者は若（連）頭と呼ばれる。拍子木を持って山車の出発・停止などを合図したり、梶子で山車の

方向を操ったりと、祭りの場における山車の曳き廻しは若連のパワーによるところが大きい。高校を卒業すると若連に加入するのが通例である。女性や子どもは若連には含まれず、若連とは別に婦人会や子ども会が設けられ、男女子ども大人問わず山車の曳き手を担っている。

下図は山車の曳き廻しの姿を表したものであるが、基本的にはどの町内も同様の並びで山車を曳き廻している。先頭と最後尾に当役がつき、彼らは山車を曳かず他町との交渉事や自町の曳き廻しの監視に専念する。山車曳きの先頭エリアは子ども、中間部は女性が占めており、山車に最も近い部分は若連によって固められている。山車前方にいる若連が年長者で、後方を年少者の若連が担うのが通例であるようだ。このような並びで曳き手は「ワッショイ、ワッショイ」と掛け声をかけつつ山車を曳き廻す。

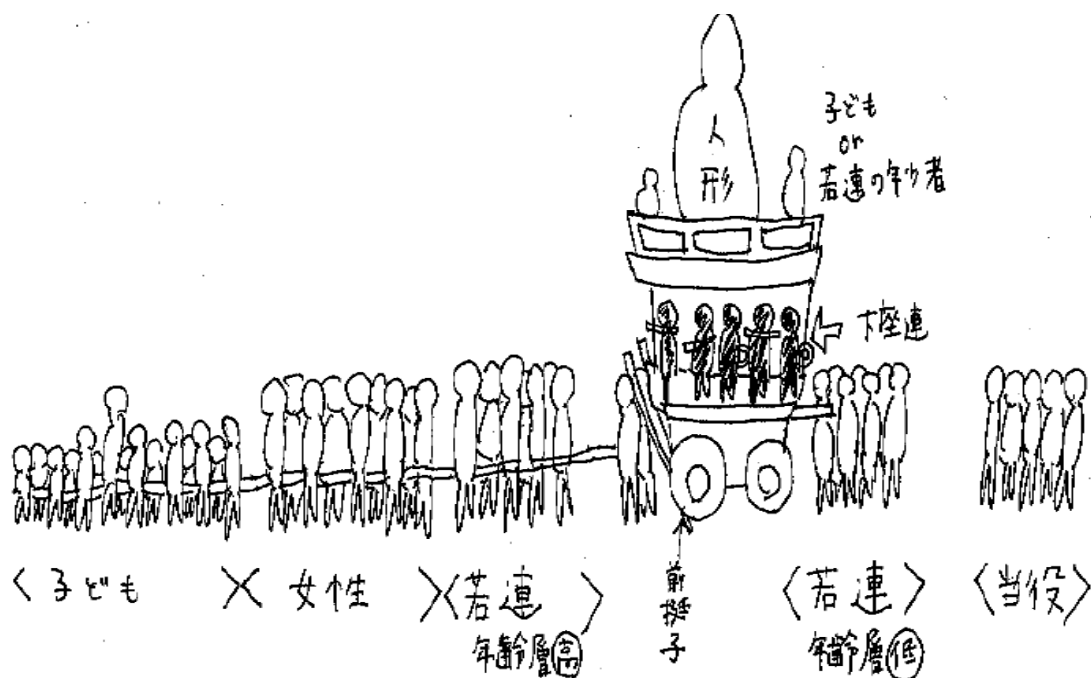


図 10 佐原の山車曳き廻し図（岸和田だんじり祭りの図（森田、2007、pp.17）を参考に筆者作図）

## （2）祭りにおける各町内の組織の詳細

本・新宿、町内ごとに多少の違いのある町内会組織だが、根幹部は共通している。基本的には、町内会組織のなかに祭事関連の役割が組み込まれている。しかし、町内に現在居住しておらずとも、かつて住んでいた・親戚がいるなどの関係性があれば、祭りの組織に所属できる。





図 11 町内位置図（佐原の秋祭りパンフレットより引用）

	新橋本	浜宿	下川岸
町内世帯数（住民数）	19（55）	169（405）	389（921）
当役の人数	12～18名	16名	12名
若連数	35～40名	35名	60名
女性・子どもの参加者数	40名弱	62名	80名
町外住民の受入れ	積極的	積極的	基本的には自町住民のみ

図 12 新橋本・浜宿・下川岸町内における祭り組織の基本情報

上図に記載した項目順に、まず町内世帯数についてだが、新橋本町内は忠敬橋の真横に位置し、佐原市街のメインストリートに面しており、新宿の祭礼町内のなかでは最小規模の町内である。2012年4月時点で、町内世帯数は19世帯、15～64歳人口は26名しかおらず、自町居住者の若連数は5名程度と言われており、その他の30名以上の若連員は町外居住者である。浜宿は佐原地区において中規模の人口を有する町内である。下川岸は利根川沿いに位置し、かつては農業が営まれていた広範な地区であり、人口も地区内では最大規模となっている。この3町内は人口においては圧倒的な差があるものの、当役数や若連の数にはそれほど差はなく、実際の場においても遜色のない祭りが執り行われている。

次に、当役の人数については、新橋本では、例年10人前後設定されている。下川岸では3期生という形をとっており、12名と設定されている。当役長には基本的に若連頭経験者



が就くが、就任するうえでその職業は問われず、サラリーマンでもなることが出来る。実際に新橋本町内の今年度当役長は、勤め人であった。当役長に就任するうえでは、居住年数や町内で商業を営んでいることではなく、祭りに熱心に取り組む姿勢と人脈が重要視されていると言える。しかし、各種会議は基本的に平日午後 7 時前後から開催されるので、他地域で暮らし、働いている人が当役長として責務を果たすうえでの負担は大きい。若連の数に関しては特に人数上の決まりなどは、設けられていないが、30～40 名が通例であるようだ。

町外住民の受入れに関しては、町内住民数が非常に少ない新橋本では、町外住民の祭り参加を積極的に受入れている。具体的には、近隣地域の幼稚園のみならず、他地域である柏の小学校から、30 名ほどの学生を受入れて祭りに参加させるなどの取組みが見られる。一方で、住民数が多い下川岸では、基本的に自町の住民のみが参加できるとされている。それは、この地区は住民数が多いため町内だけでも十分に人員を集めることが出来ること、かつて下川岸においても、積極的に外部からの参加者を受入れていた際に、暴力団関係者が紛れこみかけたことによる。

### (3) 山車の曳き廻し

山車の巡行ルートは各町内によって異なり、現在では、自町内を中心に曳きまわす町もあれば、遠隔地にある他町内にまで出かけていく町内もある。これは、祭りの寄付金の集め方と関連している。祭りの運営費は一町内で 300～500 万円程だが、これは基本的に寄付金（美羅と呼ばれる）に拠る。美羅は当役が祭りの行われる、ひと月前からその前後に町内の一軒一軒を訪ねて集金するが、自町内で目標金額を集められる町内もあれば、自町内のみでは集められず他町内にも寄付金を集金にまわる町内もある。寄付金が町内のみで充足するかどうかは、町の大小に拠るのではなく、小さい町でも大店があれば自町内で回収できるなど町それぞれに個別の事情がある。そして、前述のように、美羅を頂戴した家の前では、山車を止めて手踊りを披露する。それゆえ、山車の巡行ルートは寄付金を頂いた家・そして各町内山車の曳き廻しの兼ね合いで決定されている。

しかし、1992 年に本宿有志が集って出版した『佐原市本宿の歴史と民族』によれば、当時、山車はそれぞれの町内を巡り、また、本宿各町内を巡るときも橋を渡って小野川を越える事はなかった。小野川を越えないことは、対岸である新宿の秋祭りにおける山車についても同様であった。このような山車の巡業ルートは、町内の住民にあらためて自己の帰属領域を意識させるものであったという。それゆえ、本宿新宿をまたいで山車の巡業を行っている現在は、「見せるための祭り」への再興活動の過程という側面と同時に、佐原地区を包括して帰属地域として意識させるものとなりつつあると理解できる。

### (4) 祭り組織における秩序維持

このように各種の縁が入り乱れ、多様な層が祭りに参加するようになってきているなか、

祭りの運営においては、なぜ一定の水準と秩序を満たし続けられているのか。そこには、年功序列制の徹底が存在している。この年功序列とは、組織に所属してからの年数に対する序列となっている。それゆえ、例え中年、老年になってから祭りの組織に参加するようになったとしても、まずは若連に所属し自分より目上の当役や先輩若連の下で修業をつむことが必須となる。このような年功序列制、そして役割による階層分けがしっかりとなされているからこそ、どの町内においても遜色のない祭りが運営されていると言えよう。以下の東関戸区当役の手記には、そのような役割における姿勢の違いが当事者目線で語られており、厳格な秩序の維持が保たれている様子が見てとれる。

今日は秋祭りに向けて大事な会議がありました。平成21年度新宿惣町幣台当役会議。祭りに参加する町内の役員（当役）が一同に集まって会議をします。今日までに何回か区長、当役長会議を経て、交通安全対策会議を経て、決まったことについて報告、質疑応答が繰り返されます。初めてこの会議に参加したときは結構緊張していて、配布された資料をよく読んでいたな・・・と思い出されます。たかが祭り、されど祭り。規約や心得、申しあわせ、交通規制や緊急の場合の対処等、若連のときはあまり気にしていなかったことが立場が変わると気になってしょうがない。知らなければいけないこと、結構ありますよ・・・。

会議が無事終わると懇親会へ。各町内の半纏を着た当役が109名集まったとのこと。圧巻ですね・・・。伝統を感じます<sup>7</sup>。

### 3-3 選択縁、選択できない縁の相互関係

前節で述べたように、新橋本においては山車の巡行は自町居住者・転出者・助っ人<sup>8</sup>の3種類の参加者によって成り立っている。新橋本で育ったが、現在は他の場所に住んでいるという二男三男や、その親戚などの転出者が祭りの際には帰郷して祭りに携わる。そして、町と姻戚関係をもたない助っ人は、近隣地域や遠方など様々な場所から、佐原に集う。これらのことから、町内における佐原の祭りが地縁という基盤のうえに、血縁や社縁の存在が折り重なって運営されていることがわかる。中規模町内である浜宿の例を挙げると、浜宿の当役16名中で町内居住者7名、元町内居住者6名である。また、若連35名中、町内居住者8名、転出者8名であり、当役の3名、若連の19名は浜宿町内に居住した経験はないものの、町内組織に属し、祭りに継続的に携わっていることがわかる。

ここで、1章でふまえた選択縁・選択できない縁という視座を取り入れて分析を行うと、

<sup>7</sup> 社長☆ブログ『社長のつぶやき』桶市ハウジング 2009年9月11日

<sup>8</sup> 吉田竜司は「伝統的祭礼の維持問題」において、岸和田だんじり祭りの担い手を自町居住者・転出者・助っ人の3種に分類した。転出者は地区内の他町や他地区に転出しても、かつて住んでいた町内の祭りに参加する者を指し、助っ人は、町内と姻戚関係を持たない他町・他地区からの参加者を指す（2010、pp.35）。本稿でもこの分類に倣い、山車祭りの担い手を分析する。

そもそも商業の振興と町内の階層の確認という目的をもっていた祭りが、産業構造や就業構造の変化によってそれらの目的をもたない今となっては、祭りに関わることそれ自体も選択可能なものとなっている。事実、1950年代には本宿町内でも山車を手放し売却したり、八坂神社関係の付き合いから脱退したりした町内もある<sup>9</sup>。このようにマクロにみると祭りに関わるという行為それ自体が、各町内の選択できるものとなっている。

その一方でミクロな視点に立てば、自町居住者が地縁や血縁という選択できない縁という基盤に基づいて祭りに参加していることに対し、転出者は血縁や地縁を有しているとは言え、もはや町内から離れられない関係ではなく、各人の判断次第で祭りに参加するかどうか選ぶことができる。助っ人に関して言えば、その参加は完全に各人の選択に委ねられている。その傍らで、転出者や助っ人祭礼のための町内組織に入るうえでの規制はないが、組織に入るうえでは会議や維持活動に参加することは必要条件となる。そのため、転出者や助っ人であれ、10年以上祭りに携わることが通例である。このことは、選択縁で祭りに参加している転出者や助っ人との関係を、選択できない縁に結びなおす仕組みとなっていると言える。

小規模町内である本宿の下仲町区では、祭り運営にあたっての若連確保のために、同地区在住の若者のパーソナルネットワークが組織化された梅若会が存在する。1994年頃に発足したこの会の会員のほとんどは下仲町区の住民ではないが、祭礼の際には若連としての機能を有しており、小規模町内である下仲町区の祭礼運営にとって必要不可欠の存在になっている。この組織もまた、選択縁を選択できない縁へ結びなおす仕組みと見てとれる。

このような縁の相互関係について、1章2節で述べた視座に基づいて分析を行うと、選択できない縁的な側面を、選択できる縁へと変化させることは、地域帰属という特権の付与であると考えられる。祭りへの参加不参加を各人の選択に委ね、従来は祭りに参加できなかった町外住民や若い女性達の許容という、祭りそれ自体への門戸を開放することで、従来の参加者層や新たな参加者層に、祭りを介して地域帰属を選び取らせる姿である。その一方で、自町居住者でなくとも若連、若頭として経験を積んだものであれば、当役に属せるし、当役長にもなれるという、選択縁を選択できない縁への鑄直しは、各人に付与した地域帰属という特権を、確固たるものにする姿であると言えよう。都市化にともなって、血縁・地縁・社縁という「選べない縁」の原理による、共同と組織化を前提とする集団の帰属意識というものが衰退しつつあるなかで、佐原の祭りにおいては、このように、「選べる縁」と「選べない縁」の相互作用によって祭りを介して地域帰属が再構築されている。

---

<sup>9</sup> 千葉県立房総のむら『佐原市本宿の歴史と民俗』1992

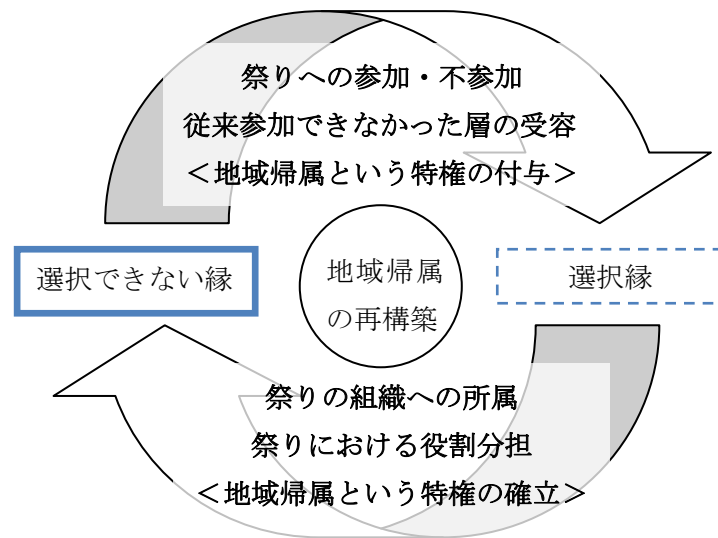


図 13 縁の相互作用の構造

このように、佐原の祭りにおいては選択縁と選択できない縁の相互作用が見受けられるが、これらの背景には佐原地域構造の変容がある。この点については、4章2節でより詳細な検討を行うこととしたい。無論、依然として選択できない縁が色濃く残る足場もある。祭りを運営するうえで若連や婦人会に町外住民も加入が認められるようになりつつある一方で、これらの外部人員は町内の住民の知人友人関係を通じたパーソナルな関係によって確保される。ネット上での公募やボランティアを募って開放するという方法はどの町内でもとられておらず、会員の学校の友人や職場の同僚など、何某かの縁故のある人が参加している。それゆえ、町内に何の伝手ももたずに祭りに参加することはできず、何らかの縁を頼らねばならない。また、下川岸のような大町内では、人手は小町内のように不足していないため、原則町内居住者のみ参加できるとしている。しかし、これは町外住民の排除を目的としているのではなく、祭りの地域としての自律性を維持するためのものであると考えられる。

## 第4章 地域帰属の再構築

### 4-1 周縁と祭りの関わり

ここまで、佐原の祭りの町内組織に関して詳細に述べてきたが、この節では、佐原の町内と祭りをとりまく周縁部について整理する。山車の曳き廻しに関しては町内に委ねられているが、市や佐原商工会議所、水郷佐原観光協会、学校・PTAそして香取警察署も祭りの運営においては関わりをもっている。また、序章で述べたように、佐原においてはここ20年の間に住民主導のまちづくり団体が作られ、精力的に活動することとなった。この節では、それらの活動団体を、祭りとの関係性に留意しながら整理する。

#### (1) 祭り関連アクター

##### (i) 香取市

市は事業主体（NPOまちおこし佐原の大祭振興協会）へ事業補助金を交付し、駐車場・用地借用などの各種申請、テント・トイレ・警備会社などの手配の手続きを行っている。そのほかには、佐原の大祭のポスター及びチラシをNPO法人まちおこし佐原の大祭振興協会と共に作成し、NHKをはじめ、各マスコミ等へ佐原の大祭のPRを行っている。これらの活動以外では基本的に市としての関わりは行っておらず、それゆえ各町内の祭りに関する記録なども市は有さず、一貫して町内が主体を担っているが、市の職員には町内居住者も勿論存在し、祭りの担い手のネットワークは行政内にまでも及んでいると言える。

##### (ii) NPO法人まちおこし佐原の大祭振興協会

2章4節で述べた佐原の大祭の振興における立役者であり、1988年の水郷佐原山車会館の建設に向けて市の主催のもとに住民が集ったのがきっかけで、1993年に住民の主導によって母体である佐原の大祭実行委員会が発足した。佐原の大祭は、住民が楽しむという要素がかねてより強かったが、活動を通して「自分たちが楽しむための祭り」から「見せるための祭り」へのフレームの転換を促進した。現在も、大祭前のPR活動や大祭時におけるガイドの運営や物販、観光客対応を中心に活動しており、観光客・来街者と町内の中間にたつて、接点を生み出す存在として理解できる。以下はその組織図である。

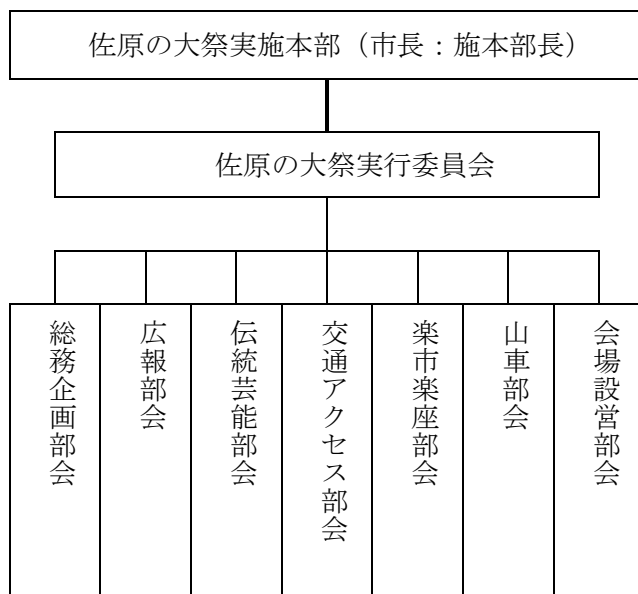


図 14 NPO法人の組織図（市役所の質問回答文より引用）

会員数は34名で（男性29名、女性5名）、法人会員9社となっている。会員の多くは町内居住者かつ祭りの担い手や経験者であり、女性陣も夫が当役・古役を務めているなど、祭りに直接の関係をもっている人が多い。しかし、そのような層は祭り時には自ら祭りに参加してしまうため、「お祭りボランティア」として祭り時に解説を行う人手の不足に困っているほか、NPO自体への参加者集めにも苦心しているのが現状である。祭り時以外は、佐原の山車祭りや香取市自体を全国的に有名にするための広報活動や、近隣小学校における伝統芸能教育活動を中心的に行っている。現在は祭り時に行う物販から主な収支を得ているが、この売上げは天候によって大きく左右される。それゆえ、資金繰りにおいても改善を要する点はあるが、他アクターと連携しながら活動が続けられている。

### (iii) 株式会社ぶれきめら

2002年に市民、佐原商工会議所、香取市の出資により第三セクターのまちおこし会社として設立された。観光事業で、まちの活性化を図ることを目的としており、飲食店経営や休憩所の運営、遊覧船の運営、空き店舗の借り上げと貸し出し、そして各種イベントのプランニングを行なっている。観光遊覧事業は、佐原の大祭再興活動の際に、利根川河川敷の駐車場と市街地中心部を川舟でシャトル輸送したことを発端としており、この事業が結果的に、舟運で栄えた小江戸佐原を大きくアピールすることになった。

この組織の存在は、旧佐原市役所の元職員であり、なおかつ市民でもあるN氏と、佐原商工会議所の雄であるK氏の力によるところが大きい。そもそも佐原で生まれ、官僚から佐原市へと異動して佐原のまちづくりに意欲をもっていたN氏と、佐原の町内で商業を営

んできたK氏、そして古くから囃子の保存など祭りそれ自体に緊密にかかわってきた町内における有力者であるS氏の三名を筆頭として、商工会議所議員や町内住民によって祭りの再興活動が進んだ。その過程における駐車場の新設や舟運の開通といった取組みは、国土交通省と人脈をもつN氏がいたことにより、進捗を淀みのないものにした。また、商工会議所の会頭であり、東関戸区長を努めていたK氏の存在は、町内の商業者を活動に巻き込むうえで大きな影響力をもっていた。K氏とN氏の二人三脚的な歩みにより大祭への観光客が増えるなかで、遊覧船事業を目玉とした観光まちづくりへの機運が高まって設立された。N氏は、「配当は町の賑わい」をぶれきめらの設立当初からの原則にしており、株主が50人以上に増えた現在でも、それは変わっていないという。

#### (iv) 佐原商工会議所

佐原商工会議所は、祭り時には直接的な関わりとして、祭りの観光客に対して、トイレ・休憩所・祭のビデオ放映・オムツ替え・授乳等のコーナーを設けている。間接的な関わりとしては、イベント広場の設営に対する協力を行っている。イベント広場においては、会議所に関わる団体が出展しているため協力を行っているが、物販等を直接行ってはおらず、あくまで間接的な協力にとどめている。また、山車持ち町内に属する議員も多く、彼らは祭りの担い手として活躍している。

#### (v) 水郷佐原観光協会

佐原観光協会は香取市経済部商工観光課をバックボーンにもち、佐原駅前で観光案内所を運営している。職員2名のほかにパートスタッフが数名おり、スタッフは基本的に佐原近隣居住者であるため、スタッフのなかには佐原の祭りに昔から関わってきた方も在籍する。観光案内所が位置する新宿で行われる秋祭りの際には、案内所前で地域名産品などの物販を行うほか、案内所を開放して祭りの案内や英語ボランティアを行っている。

#### (vi) 学校及びPTA

地区内の学校及びPTAは、祭り時に見回りパトロールを行って、未成年者が危険に巻き込まれないか監視している。前述の通り、祭りの再興活動と観光客の増加に伴い佐原の祭りの風紀は良くなったため、負担は以前に比べて軽いものとなっている。

#### (vii) 香取市警察署

山車祭りの際の治安維持や交通安全を町内と協力して行っている。祭りが行われる際には町内は車輛の通行止めとなるため、町内は各種会議をへて警察署に道路安全許可願いを提出するなど、密接な連携をとっている。市役所とは異なり警察署には、町内住民のネットワークが通じていないため、祭りについての捉え方を共有する際には困難が付きものとなっている。

## (2) 各種住民団体

### (i) NPO法人小野川と佐原の町並みを考える会

1991年から、住民が中心となって町並み保存の活動に取り組んでいる会であり、佐原の景観まちづくりにおける中心的存在である。各種調査や勉強会を通して、保存活動を推し進め、その活動が功を奏して1996年には国の重要伝統的建造物群保存地区に、佐原の一画が選定された。2004年にNPO法人格を取得し、2006年には佐原町並み交流館(佐原の旧市街における観光案内の拠点)の指定管理者となった。東日本大震災によって生じた町並みへの被害の対応・検討や修繕、そして観光案内ボランティアガイドや小野川清掃を、現在の活動の中心としている。町並み保存活動の初期においては、祭り振興の関係者との組織的な提携関係はなかったものの、各団体のリーダー間では、相互に情報共有・指導が行われたようである。現在では、町並みを考える会のプラットフォームである町並み交流館において、佐原囃子の演奏会が開かれたり、祭りについての写真展などの企画展が開催されたりと、団体間の相互交流が行われている。また、この活動団体員にも山車祭りに憧憬の深い者が参加している。以下に、『町並み保存と再生—まちづくり 20年のあゆみ—』という、この会の出版物に寄せられた一会員の手記を引用する。

祭りの似合う町 私は、小さな頃から祭りが大好きで、よく山車の写真を撮っていた。(中略) 考える会の活動をしていてつくづく思います、佐原の山車祭りは、瓦屋根と板塀の景色が、柳の枝と小野川の曲がり方が、細い通りの軒先が山車の提灯と鑑賞する危うさが、とっても似合う！！

山車を操る方にしてみれば、次々と現れる難題を、スマートに解決しないと、一生文句を言われる、ちとうるさいか？でも伝えていかないと祭りにならない。非日常的の感覚で、佐原囃子と共に、三日間やり通すのが佐原っ子。

この手記には、祭りの直接の担い手ではない者の視点によって祭りの姿が描かれている。町並み保存活動者には、地区居住者でありながら祭りに直接参加していない層が含まれているが、参加していない彼らにとっても、祭りそれ自体は佐原の象徴として意識されていることが推察できる。

### (ii) 佐原おかみさん会

この会は2004年に、市からの呼びかけがきっかけで設立された。佐原の町内においては男性同士がまちについて話し合う機会が多数ある一方で、女性にはそのような機会があまりなかったため、女性同士の話し合いの機会を設ける意図で、任意の勉強会として活動が始まった(白井ら、2009)。現在は地域のおかみさんが中心となって、町内にある商店で佐原の伝統文化に触れられる「佐原まちぐるみ博物館」やキャンドルナイト、「さわら雛めぐり」など、季節に応じた各種イベントを、年間を通じて運営している。以前会長を務めて



いたH氏は町内にある呉服店の婦人で、その主人は祭りの当役を努めている。現在の団体メンバーも町内のおかみを中心であるため、主人や子どもが祭りの担い手として携わっている。以下は、H氏の手記である。

私の町内は、新橋本（しんはしもと）というのですが、朝から山車（だし）の掃除をしたり、ハンマ（大きな木でできたタイヤ）や飾りの金具を磨いたり。もちろん、娘も朝からいそいそと手伝いに出かけて夕方まで帰ってきませんでした。娘の担当は金具を磨くこと。町内のお祭り好きなHさんは、時々、娘に会うと必ず山車の金具磨きの話をしていて「ちょっとプレッシャーだよ」と嬉しそうに言っていました。祭りは、昔からの伝統行事ですから、役割分担がきちんと決まっています。作業をするのは、もっぱら「若連（わかれん）」です。若連は、若頭（わかがしら）を先頭に山車の準備はもちろん、山車を実際に曳きまわすことも大事な役目です。若連を卒業すると「当役（とうやく）」となり役員的な仕事になります。

その他に区長、元老（げんろう）、古役（こやく）があります。首にかけている色手ぬぐいで見分けることができます。それぞれが大切な役割で、それが守られているので、祭りを長く続けることができるのかもしれませんが。ちなみに、白い手ぬぐいが区長さんです。私が思うには、祭りの醍醐味は、山車を曳いたり、踊ったりして参加することだと思います。だから、若連の時が一番楽しいのではないのでしょうか。夜には、娘と一緒に踊りの練習に参加してきました。祭り当日は、自分の店が忙しいので参加できないので、練習で踊ってみました。なかなか、難しいですが、見よう見まねで佐原囃子に合わせて体を動かすのはとても楽しかったです。準備や練習には、小さい子どもたちも来ていて、こうして「佐原」の人に育っていくんだなあと思ったのでした。

この手記の内容からは、佐原に住む母子の祭りとの関わり方が、そして佐原の祭りがいかにして地域に根付いてきたのかを、実際の住民の立場で解することが出来る。そこでは、世代間交流が極めて日常的に行われていると同時に、自身の役割を確認する方策が敷き詰めてある。このような日常的行為によっても、帰属意識が育まれていることがわかる。

### （iii）佐原まちおこし公社 株式会社ゼットやっぺい社

2005年に佐原の中心市街地活性化・商店街再生を目指して設立され、駅前商店街の活性化を中心に担っている。コミュニティビジネス中間支援機関としての支援や、空き店舗対策やまちづくり情報の発信、まちづくり孫兵衛塾を開催するなど、商店街の活性化に関して多面的に取り組んでいる団体である。祭りの期間中には、ゼットやっぺい社として駅前に有している「わいわい食菜館」の運営を行い、特に資金援助などは行っていない。

## （3）図示

ここまで祭り関係のアクター及び各種住民団体に焦点をあてて、祭りとの関連性を検討

してきた。佐原においては前述の通り、多様な活動団体が住民主導でまちづくりを行っている。そこには、祭りに基づいた、祭縁と呼べるネットワークが脈々と張り巡らされている様子が見てとれる。これらの結びつきの相関関係を表したものが以下の図である。

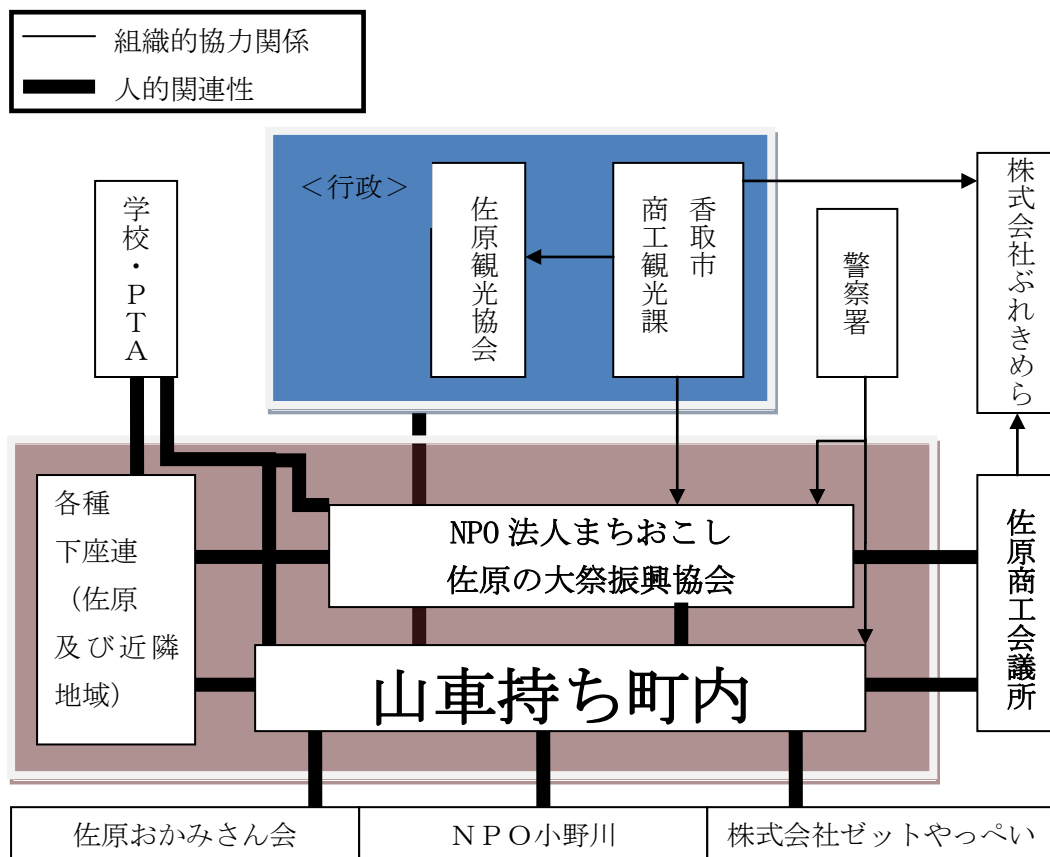


図 15 祭りを基軸とした諸アクターの関連性（筆者作図）

#### 4-2 佐原社会における民主化の様相

本節では、戦後の佐原における産業構造の変化と、それに伴う祭りの変化に注目し、佐原地域社会の民主化の背景と実像を明らかにする。本稿は佐原の祭りをテーマとしているため、佐原本宿・新宿の町内に焦点をあてて考察を行ってきたが、本節では旧佐原市という規模と本宿・新宿の両者をふまえて佐原における社会構成の変容をダイナミックに読み解く。

##### (1) 産業構造の変化

###### (i) 農林水産業中心から非農林水産業中心へ

戦後の旧佐原市は、その社会構成・生活基盤において大きく変化した。まず、産業別人口の推移をみてみると、1930年時点から1951年にかけて農林水産業の人口が増えている

が、これは合併後の佐原市には町場の性格の色濃い旧佐原地区のみならず、香取や東大戸といった農村的性格をもった地区も含まれていることによる。工業においては、農村都市特有の食料品工業を中心とした、零細な中小企業によって形成されており、その性格は家内工業が主であった<sup>10</sup>。

1960年に行われた国勢調査においては、佐原市の総世帯数は9649戸で、その内訳は農業の4457戸、勤め人の2450戸、商業・サービス業の1785戸、製造業・建設業の427戸、その他の世帯の530戸という割合になっている。総世帯数に対する割合は農業戸数が最も高いが、それは町村合併によって、農村都市的な色彩が一層濃くなっていたことによる。

しかし、その後、以下の図15をみると農林水産業従事者が1970年から1985年の間に11839から4912へと、約6割減少した。それらの佐原の近農地域における農業の衰退は、前述のように家内工業を中心とした工業にも影響を与えたと考えられる。その一方で、非農林業就業者は10865から18639へと約7割増加し、急激に非農林業就業者数が増えた。このようにして、佐原は第一次産業中心から第二・三次産業中心の地域へと変化するなかで、戦前における旦那衆であった豪農地主は、その存在基盤を失うこととなった。

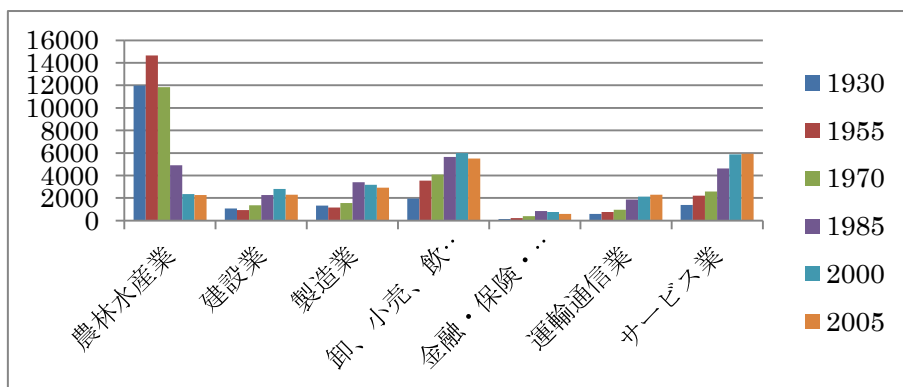


図16 産業別就業人口の推移 (市の統計情報を元に筆者作図)

## (ii) 商業構造の変化

1960年の国勢調査に関して、佐原地区においてさらに詳細にみると、新宿の899戸、本宿の453戸、合わせて1352戸で、佐原市内における商業・サービス業の総数1785戸の76%となり、佐原地区の1453戸のうちでは、93%を占めている。以上のことから、1960年時点において、佐原の商業は地区内のなかでも、依然として新宿と本宿に集中していたことがわかる<sup>11</sup>。当時の佐原地区の商業の様子が市史に記録されているため、以下に引用する。

現在、新宿には、駅前・東通り・横宿・横川岸・銀座・中川岸・中央の7、本宿には、本宿・第一と本宿共栄会の三、合わせて10の商店会がある。このほとんどが国鉄千葉・水戸線、県道銚子・佐原店などの主要交通路にそって組織されており、商店の密集度

<sup>10</sup> 佐原市『佐原市史』1966年

<sup>11</sup> 佐原市『佐原市史』1966年

は繁栄したといわれる明治時代の頃と比較しても、それほど変わっていないものと思われる。

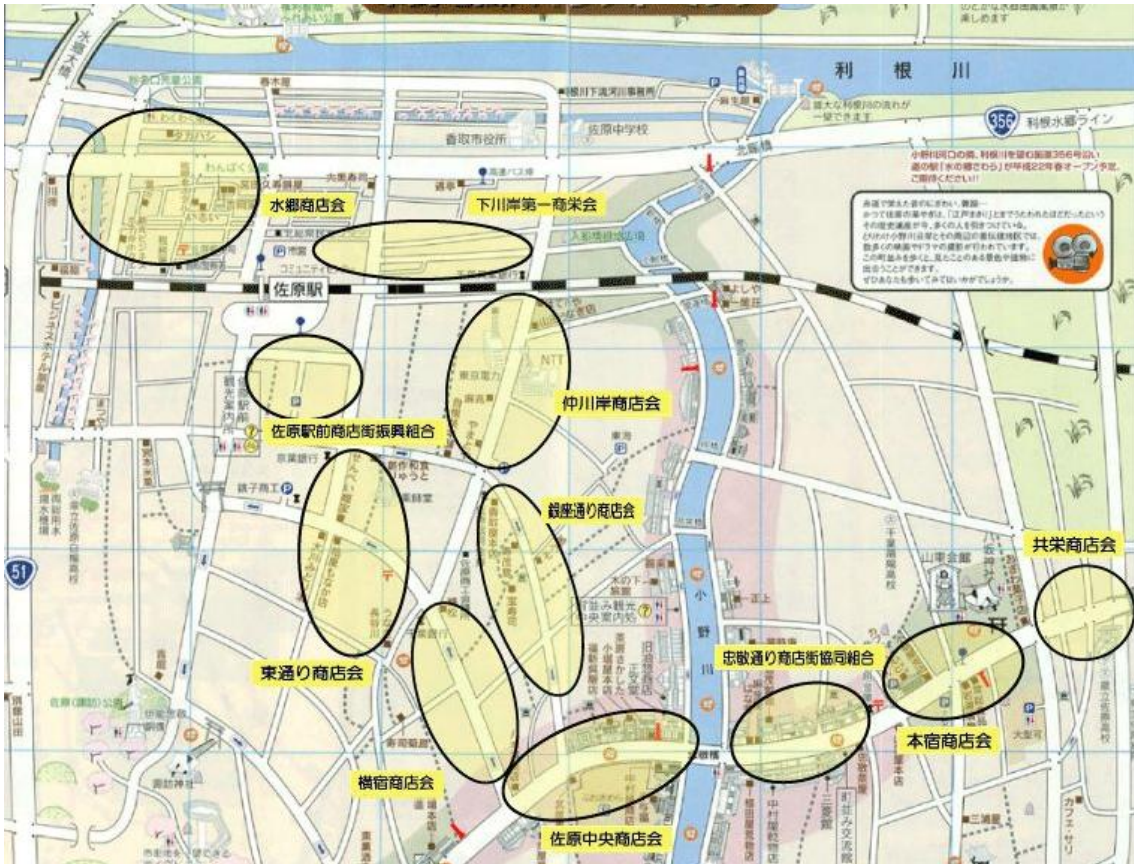


図 17 各商店会の位置（佐原商店会連合会 HP より引用）

ここで留意すべきは、1966年時点では、上記の10ある商店会のうち6つの商店会においては、会費が等級制によって徴収されていたことである。この時点ではまだ、商店会においては戦前の慣習が残っており、階層構造が残存していたと考えられる。しかし、1988年になると、均等性が8割を占めるようになってきている。また、商業の中心部も、戦前の中心であった小野川の東側から西側へと1966年頃までに移り、さらに1980年頃には駅付近部へと移り変わっていった。下図を参照すると、佐原駅前商店には、15年の間に店舗数が13店舗増えているが、この間の1970年には清美屋、1972年には十字屋、という二つの百貨店も開店し、駅前商店街エリアが新中心街となる一方で、小野川東側エリアの商店街との繁栄格差が生じていった。

現在までのあいだに、このような商業の様子はさらに変容を迎えることとなった。以下は商店会の会員数の推移を表にしたものだが、1981年時点のそれと現在の商店会数は、1981年当時の5～6割に減少している。このことから、佐原地域内全域において商業の空洞化が進んでいることがわかる。

佐原の商店会（現在の名前）	1966 年会員数	1981 年会員数	2012 年会員数
佐原駅前商店街振興組合	69	82	50
仲川岸商店会	32	34	19
東通り商店会	42	45	23
佐原中央商店会	39	36	22
共栄商店会	21	17	9
水郷商店会	-	100	44
下川岸第一商栄会	38	35	26
横宿商店会	47	48	27
本宿商店会	42	42	20
銀座通り商店会	36	29	21

図 18 主な商店会の会員数の推移

佐原市広域商業診断報告書及び佐原商店会連合会HPを参考に作成

（比較ができなかった忠敬通り商店街協同組合及び横川岸商店会を除く）

千葉県消費者購買動向調査によれば、佐原は平成 10 年までは地元購買率 70%以上、他 5 市町村以上から 10%以上の吸引力をもち、商業中心都市として千葉県内で位置づけられていたが、平成 13 年には準商業中心都市へ移行し、平成 18 年には商圏都市の括りから外れることとなった。ここ 10 年前後の間にも佐原地区の社会構成は大きく変容してきており、商業もまた存立基盤ではなくなりつつある。このような変容過程を経て、商工自営業主たちの町における支配力は、戦前のそれと比べて著しく弱まったと推察される。商店会の会費の徴収方法の変化から読み取れるように、戦前の階層的な構造は現在の佐原社会においては、その鳴りを潜めている。

(iii) 就業構造の変化

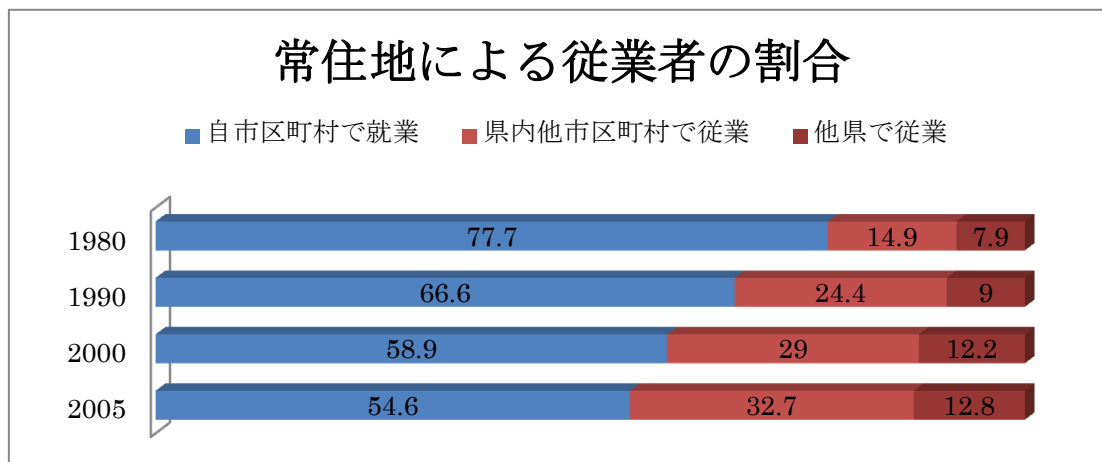


図 19 佐原における常住地による従業者の割合（市の統計情報を元に筆者作図）

上図 19 は佐原に住む人がどこで就業しているのかをグラフ化したものだが、この図を見ると佐原地区外での従業者の割合が年々高まっていることがわかる。自市区町村での就業者が 1980 年時点では約 8 割と非常に高い割合に及んでいたが、2005 年の統計では半数近くまで割れこんでいる。上図に記載されていない自宅での従業者数についても 1980 年当時は従業者総数の 45% が自宅での従業者であったことに対し、2000 年には 22% まで低下している。このことから、佐原地区における就業構造の変化が読み取れる。かつては地区内に常住して家業を営む自営者層とその従業員が大多数であったが、現在では地区外への勤め人もまたスタンダードなものに変容してきているのである。

ここまで農業、商業、そして就業構造に着目して佐原の社会構成を読み解くなかで、1 章 3 節で確認した階層構造の瓦解は、佐原においても共通する潮流であったことがわかった。このような社会構成が変容する一方で、戦前には見られなかった活動が創出されたことにも注目したい。戦後の佐原では、地域における専門部会として、1952 年に「佐原市婦人連合会」や 1969 年には「衛生組合」が発足し、地域では公民館の竣工に伴い各種のクラブ・活動や子ども会が展開された。また、生活改善クラブや農家生活改善研究会などの、生活に基づいた民主的連帯も 1980 年代には見られるようになる。

このようにして、佐原社会においては、戦前には見られなかったようなヨコの拡がりや展開するようになった。かつては家制度に基づいた階層構造という、タテの社会が基盤となっていたこの地域において、その構造が瓦解し、このようなヨコの住民組織や活動が生まれ、展開されてきた過程は、徐々に地域内部が民主化されていく姿であると見てとれる。

## (2) 町内と祭りの運営にみる、民主化の姿

前述のように、社会構成の変容を背景に、かつての階層支配構造が失われ、町内社会においては民主化が浸透していくこととなった。本節では、町内会の運営・祭りの運営・そ



して旦那衆の存在の希薄化に注目して、民主化された現在の姿を明らかにする。

#### (i) 町内会の運営

祭りの組織は町内会に付随しており、この地域では現在でも町内会が息づいている。町内会の活動は、独居老人の見回りや消防援助、会の財産管理や慶弔の世話、神社の管理が中心であるが、大きな町内であれば町内旅行なども行われる。これらの会の運営においては、現在では基本的に合議制がとられており、何か決め事がある際には「一戸一票」が徹底されるという民主的な運営がなされている。一戸に何代もが在籍していても、一票が基本である。かつての町内においては、大多数が「シロ」とみなしても、大店が「クロ」と見なせば「クロ」とみなされたというから、このような現在の姿には戦後の地域社会の変容過程が垣間見られる。

町内会の運営費である区費の集金方法に関しては、かつての「株割」という言葉は、町内住民には、もはや知られていない。大町においては基本的に均等割で各家に振られている反面、上仲町のような住民が少ない小町内では、かつての間口・戸数割の慣習が残っている。しかし、かつての階層を確認するという目的で残されているのではなく、小規模な町内が活動を継続させていくうえのための知恵として残されている慣習なのである。

#### (ii) 祭りの運営

今日の祭りの組織について 3 章で詳細を明らかにしたが、本節では祭りの運営においてみられる地域社会の民主化の姿としてその詳細を捉えていく。

戦前においては、祭りの責任役や指揮役は、商家や醸造家、そして豪農地主という「旦那衆」のみが担うことができ、町内社会は彼らを中心として成り立っていた。彼らは、土地家屋の所有、商工業者であれば、間口間数と店舗の位置、年間所得、家系・家柄、町内居住年数、町内役職やその経験などの評価に基づいて、町内における序列関係が決定され、その序列関係に従って町内費や祭りの費用を分担していた。しかし、現在の運営においては、指揮役である当役につくうえで、自営業者、町内居住者でなければならないという縛りはない。例え地域において生産活動を営んでいなくとも、町内社会に参画することが可能となっている。

また、戦前は町内居住者のみが祭りへの参加を許され、祭りの運営資金の多くを旦那衆頼みで回収していたことに対し、戦後の祭りにおいては、社会構成の変化に伴って一般住民なら誰でも寄付者たりえるようになった。香取市職員のK氏は、自身も参加する町内の祭りに寄付するのみならず、友人や縁故者のいる他町内にも寄付する。そして、友人や縁故者も、そのお返しとしてK氏の町内に寄付を行う。このような循環が、一般住民のレベルでなされるようになったことは、祭りの運営に携われる層の広がりという意味している。

現在は、祭礼費は当役が祭り前の休日に、一軒一軒もらい歩くことが儀式となっているが、その際の集金方法も多様化している。ある町内では、大きな金額を拠出してくれる家

からまわる。それは昨年度の金額との照合や、融通をきかせるための知恵である。しかしながら、大きな金額を出してくれる家があるからとあって、その家に大きな権力をゆだねているわけではない。町内区費に慣習的な割り当てが残存している町内に関しても、割り当ては、残されているものの拘束力をもつわけではなく、無論費用の大小に拠って大きな発言権を与えられるということはない。このように、分担する金額と権利にもはや確固たる相関関係は見られなくなっている。

さらに、祭りの担い手に関しても、かつては町内の居住者・従業者のみが山車の曳き廻しに携わることを許されており、若い女性や町外居住者、近隣住民は参与を許可されていなかった。しかし現在では、女性や町外居住者といった多様な参加者の受容がなされている。

### (iii) 旦那衆の存在の希薄化

かつて、町の階層構造の頂点として位置づけられていた旦那衆であるが、現在はその言葉こそ残っているものの、特別視して使われるものではなくなっている。戦前の旦那衆の定義といえば、水運業で富を蓄えた商家、周辺の穀倉地帯からの米を原料に栄えた醸造家、そして豪農地主であり、祭りにかかる費用の半分以上を少数の旦那衆が負担したため、彼らの存在なしには町内の祭りは成り立ちえなかった。しかし、前述のような町内の社会構成の変化に伴い、今日ではそのような定義にとらわれず、旦那衆については抽象的なイメージだけが残存しており、旦那衆はもはや存在しないと語る住民もいる。

というのも、現在の町内の祭りにおいては、旦那衆であろうとも立場・発言権は基本的に同等とみなされる。「旦那衆の言うことだから」と聞き従うのではなく、祭りの担い手であれば誰でも意見を述べることができる。それは、町内居住者でも、転出者・助っ人でも同じことであり、自営業者であろうとサラリーマンであろうと、同様である。そこでは、旦那衆の息子だからとあって、優遇されることはない。新宿の上仲町においては、町内区費は現在でも各家の金額の割り当てが残存しているものの、発言権は前述のように「一戸一票」が徹底されている。ここに、佐原という町内社会における民主化の様子が見て取れる。

そのようななかでも、漠然と残存している旦那衆の定義づけは「町内に多めにお金を出す人」「口を出す人」「文化のスポンサー」という曖昧なものになっており、名家の生まれだからという理由よりも、「町や祭りを良くしよう」という姿勢こそが旦那衆と認識される際の特徴となっている。このように、旦那衆はもはや観念的な存在となりつつあり、かつてのように権力を行使してはいない。無論、現在でもそう呼ばれる人は町内に存在し、影響力を持つ人もなかにはいる。そのような旦那衆こそが、佐原の祭り振興活動の立役者である。

ここまでの (i) (ii) の記述から、町内や祭りの運営に携わる権利が、家柄や職業に関わらず、広く住民に付与され、各人が町内社会の治政に主体的に関われるようになったこ



とがわかる。そして (iii) によって、旦那衆の存在は佐原地域においては観念的なものに変容しつつあることを明らかにした。これらのことは、佐原という地方都市社会の戦後において町内レベルに民主化が浸透した姿であると言えよう。

#### 4-3 地域帰属の再構築の姿

前節までの流れをふまえて、本節では、佐原の祭りにおける地域帰属の再構築の姿を、実情をふまえながら明らかにする。

うちの若い社員が入社の際に私に出した条件というか、希望は、お祭りに休みを取らせてくれること。それだけ<sup>12</sup>。

夜は町内の祭りの集まりで、今日は朝、昼の食事抜きのまま・・・合流です。3日間の山車のコースを決める会議と、下座の依頼。今日の帰宅も深夜2時・・・明日の評議員会議で承認されればコースも決定です。最近、家族の顔よりも町内の祭りの仲間の顔のほうが見ている時間多いかも・・・これが佐原ですよ・・・<sup>13</sup>。

上記は東関戸町の当役による手記からの引用であるが、この内容からは、祭りと祭りをつくる過程それ自体が、いかに担い手に心待ちにされているものなのかが読み取れる。祭りの参加者にとっては、祭りは「生きがい」と言えるほど大きな意味をもっていること、そしてその祭りを介して佐原という地域への帰属意識を高めている様子が、「これが佐原ですよ」という言葉から理解される。佐原地区は、社会構成を以前のそれとは変容させたにもかかわらず、現在までも伝統的な祭りが続けられてきた。そこには祭りそれ自体が触媒となって、地域帰属の再構築が行われている姿がある。

お祭りを中心とした町という気持ちをみんな持っていて、町の中で共有するものの一つがお祭りという形として現れているので、町並みにしても、そこで色々な人とどうやって付き合うのかが、お祭りを通して覚えていることなんでしょう。お祭りの若頭に「祭りには茶髪は似合わねえ」と言われれば、次の日みんな真っ黒にする、というような話も聞きます。非常に濃密な人間関係ですけど、その中で生きていけば、それも環境なり空気みたいなものなんだろうね。

伝統の継承という面もありますが、町の統治システムや秩序を毎年再生産しているという意味が大きいと思います。それと同時にプライバシーはゼロですが、それぞれの事情もわかりますから、お互いの状況に応じてかかわることができることも、大きく作用していると思われます(添田、2009、pp. 11)。

<sup>12</sup> 社長☆ブログ『社長のつぶやき』桶市ハウジング 2011年7月11日

<sup>13</sup> 社長☆ブログ『社長のつぶやき』桶市ハウジング 2009年9月12日

このように現在では、祭りそれ自体が目的となり、祭りの担い手は「佐原に属している」という一体感を味わうことをその醍醐味としている。そして祭りがあるからこそ、自身の帰属意識を再確認することが可能となっている。この背景には、前述の通り佐原における地域社会の変容の過程と、それに伴う町内社会の民主化がある。その背景を基盤として、一握りの支配者ではなく、町内居住者なら誰でもが主体的に参加することができ、町外居住者までも包括して、担い手が「一体」となって楽しめる現在の祭りの姿があると言えよう。そしてこの姿こそ、個人を地域と結びつけて地域帰属の確認それ自体を楽しみとなすという、コンサマトリーな祭りの姿そのものである。

いかに担い手たちにとって楽しみとされているかは、NPOまちおこし佐原の大祭振興協会の人材不足からも逆説的にはあるが、理解できる。この組織には20名以上のスタッフが在籍しているが、スタッフのなかには町内の祭りの担い手も多い。それゆえ、祭り時のお祭りガイドボランティアは人員不足に困ることとなっているが、それは、祭り時になると自身が楽しむために、祭りに参加してしまうからなのである。

年代	戦国末期～明治初期	明治中期～昭和初期	昭和中期～現在
地域産業構成	農業基盤と商業基盤に基づいた自営業中心		商業・農業基盤弱体化 勤め人の増加
地域社会構成	階層構造に基づく連帯による共同体		民主的連帯の浸透 町内会における1戸1票
山車祭り資金源	旦那衆中心	旦那衆中心 (新旧の交代が盛ん)	地域の一般住民
寄付金額と発言権	関連性あり		確たる関連性なし
山車祭りの指導者と担い手	指導者：旦那衆（町内政治においても覇権） 担い手：町内の働き手 下座連：近隣農村		指導者・担い手ともに町内住民であれば誰でもなれる（町外住民も）
山車祭りの様相	萌芽 華美化、大規模化	祭りの基盤の整備（山車曳き廻し規約の完成）	住民だけで楽しむ閉鎖的な祭り 近年、見せるための祭り
祭りの価値	商業振興 階層確認 共属確認	階層確認 共属確認	共属確認

旧来の階層構造の崩壊と、民主的な基盤の浸透

インストゥルメンタル

コンサマトリー

図 20 佐原社会構成の変化と祭りの変容

戦後の民主化政策と産業構造の変容、都市化の進展

## 終章

### (1) まとめ

本稿では、佐原の祭りを研究対象として設定し、

一、 佐原における社会構造の現在に至るまでの変容を、祭りの変容と関連づけ読み解く

二、 現在の佐原の祭りの実像を明らかにして、地域社会と祭りの相関性を探る

の2点を研究目的として設定した。研究の足掛かりとして、第1章において、目的志向的な祭りと言自己充足的な祭りという、伝統的な祭りにおける価値の二面性が存在すること、そして、祭りにみられる選択縁と選択できない縁の相互作用によって、帰属意識が構築されることを確認した。そのうえで、佐原という地方都市の変容を理解するために、地域社会における旧来の社会構造の瓦解と民主化の浸透という全国的な潮流を把握し、これらをふまえて、以下の3点の仮説を立てた。

(1) 佐原の祭りはかつて、商業振興と階層の確認というインストゥルメンタルな価値が支配的だった。(手段の目的化) ⇒2章

(2) しかし、現在の祭りでは、選択縁、選択できない縁の相互関係によって、地域帰属が強固なものになっている ⇒3章

(3) ゆえに、祭りの過程そのものを「楽しみ」とし、地域帰属の確認をなすという、自己充足的な祭り本来の姿をみせるようになってきている。そして、この変容の背景には地方都市の民主化の過程があった。⇒4章

2章においては、佐原地域と祭りの歴史的な流れを整理し、分析を行った。戦国末期頃から江戸期にかけて、舟運で繁栄した佐原における祭りは、地域帰属という祭りの本来的価値のみならず、町内と周辺農村を包摂した商業振興としての目的、そして商業町としての町内社会の階層の反映というインストゥルメンタルな価値が支配的だった。その後、地域社会の産業構造の変化に伴い、山車祭りの曳き廻しの様相も変化した。その過程では本来もっていた目的志向的な側面が徐々に薄れ、町内住民が中心となって楽しむ祭りと言コンサマトリーな祭りへと変容したことを明らかにした。

続く3章では、現在の佐原の祭りの実態についてヒアリング調査を元にして、その詳細を把握した。山車祭りの組織においては町内居住者、転出者、助っ人が存在しており、山車の巡業は寄付金の拠出先に基づいて行われている。そのような祭りの組織においては年功序列制の徹底により、多様な参加者を包摂しながらも、秩序が維持されていた。そのうえで、現在の祭りにおいては、祭りへの参加不参加の選択や、新たな参加者の受容、そして組織への継続的参加と役割の割当てのように、選択縁と選択できない縁が相互に結びなおされることによって、地域帰属の付与と確立が行われて、地域社会に対しての帰属意識が再構築されている姿を明らかにした。

そして、4章においては、祭りを起点として諸地域活動を分析し、祭りを介した地域帰属

が他の住民活動にも根を張っている姿を図示した。このような姿の背景には、農業基盤の崩壊・商業構造の変化・雇用労働者の増加という社会構成の変化によって、従来の階層基盤が崩壊を遂げたことがある。現在の地域社会においては、町内会における 1 戸 1 票の徹底に象徴されるような、町内・祭りの運営における参与権の拡大と旦那衆の形骸化がみられ、地方都市である佐原の社会が民主化の様相を呈するようになってきたことを考察した。

ここまでの流れから、仮説 1~3 の立証を行った。そして、佐原の山車祭りは地域社会の変容に伴い、目的志向な祭りから、祭りそれ自体が目的に変容し、現在の民主化された佐原の町内社会においては、祭りを介して多様な参加者の間で、地域帰属が再構築されていると結論付けた。

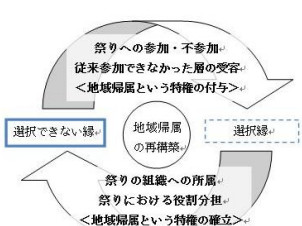
本稿の流れ

<第1章>分析視角の検討

伝統的祭礼の価値の二面性 ・階層支配の確認（目的） ・地域帰属の共有（本来の意義）	祭りのメカニズム ・選べない縁・選べる縁 祭りにおいては、両者の結びなおしによって集団帰属を再確認する	町内社会の民主化 ・戦前の社会構造 ・既存の階層基盤の瓦解 ・民主化の地域社会への浸透
---	---	--

仮説の提示

①かつては商業振興と階層の確認という目的が祭りにおいて支配的だった	②現在は、選択縁・選択できない縁の铸直しにより地域帰属が強固な祭に	③祭りそのものを目的とする姿への変容。背景には地域社会の民主化が
-----------------------------------	-----------------------------------	----------------------------------

<第2章>仮説①の検証 地域の歴史的変容と、それに伴う祭りの変容分析 ・河港商業都市期 商業振興と階層確認という目的をもつ祭り ・地域拠点都市 階層確認という目的 ・商業の低迷 地域内部で楽しむ祭り	<第3章>仮説②の検証 現在の祭りの実態の分析 ・町内居住者、転出者、助っ人という担い手 ・山車の曳き廻しの変化 	<第4章>仮説③の検証 他アクターと祭りの関連性及び、地域の社会構成の変化の分析 ・祭縁のネットワーク ・産業構造と就業基盤の変化に伴う、旧来の支配階層の崩壊 ・町内会、祭り組織に見られる民主化の浸透
--	--	--

仮説の立証

<結論>

佐原の山車祭りは地域社会の変容に伴い、目的志向な祭りから、祭りそれ自身が目的に変容した。今日の民主化された佐原の町内社会においては、祭りを介して多様な参加者の間で、地域帰属が再構築されている。

## (2) おわりに

大学1年生の時に初めて訪れた佐原で、筆者は驚愕した。東京から1時間半かかり、交通の便は決して良くないにも関わらず、町に活気が溢れていたからである。小江戸の街並みは確かに風情があり、観光客を惹きつけるには申し分ない。しかし、観光客だけでなく、町全体から賑やかさが感じられた。これは、日本各地を旅行するなかで、様々な市街地の衰退を目にしてきた筆者には、とても新鮮に感じられた。

この地域は、東日本大震災を受けて、重伝建指定された棟のうち半数の40棟以上が、瓦の落下、土蔵の崩壊、液状化などの深刻な被害にあうこととなった。それゆえ、昨年11月に再度訪れた際には、2年前ほどの観光客は町なかにはいなかった。しかし、震災の復興に向けて、街をあげて活動していこうという姿勢が強くあることを、住民の方々と会話する中で発見した。

このような背景から、「この町の結束力の源はどこにあるのか」という疑問が本稿の出発点にある。ここまでの研究から、現在においては佐原の祭りが、地域帰属の確認それ自体を楽しみとしている姿が明らかになった。このことこそが、出発点の問いに対する回答である。年に2回の祭りによって、地域住民は町内社会で様々の交流を行い、地元自営業者もサラリーマンも、それを糧にして生きているからこそ、地域における凝集力が形作られているのだ。

では、いったい祭りにおいて楽しみとされている地域帰属の心理とは、具体的にいかなるものであるのか。本稿3章4節で、縁の錆直しが起こっていることを明らかにしたが、これらの縁を結びつける根底には、「地域をあげて群れることの一体感」が祭りを介して共有されていると考えられる。というのも、これは町内の祭りに関わっている方々15名ほどにヒアリングを行うなかで、ほとんどの人から聞かれた意見であった。この「群れの一体感」という、祭りに参加することで共有される心理こそが、祭りの楽しみとされている地域帰属なのである。それはまさに、現在においても地縁が人びとのアイデンティティの供給源の基盤となっている姿であると言えよう。

(現代祝祭においては、) 祝祭行為の終了とともに残るのは、参加し、散っていった人—みる人個人個人の自己充足感であって、過去の伝統的祭礼のように、地域社会に急進的に働いて社会統合を果たすものではない。それは、縁のネットワークのなかで、個人の自己充足の欲求をそのままにあらわしているのであって、その点ではみる者もスる者も、本質的に同じ土俵の上に立っているのである。それは、祝祭行為のなかで生じる合衆的な共感にもとづく共同幻想であるともいえる。(中略) この場合、そうした共同をどのようなものとして感じるかは、個人の感性の問題である。こうした祝祭での共同は、個人個人がそれぞれにつくりだす意味づけを累積して、はじめて成り立つ共同だ、といってもよい。(中略) しかしそれにもかかわらず、それは個人のなかに人間の絆についての信頼感にもとづく共同の「楽しみ」をつくりだす。そしてそれ自身が、縁のネ

ットワークのなかでの生きる証ともなる。こうした「楽しみ」こそが、脱産業化へ向かう時代の新しい自己充足の一つの形なのであり、新たな生活文化への模索の結果なのだ（松平、1990、pp351-352）。

松平は、近年増加するYOSAKOIソーランや高円寺阿波踊りなどの現代的な祝祭において、上記の通り新しい自己充足の形がみられることを指摘している。上記と佐原の山車祭りを比較するならば、現在まで地縁を基盤とした祭りが、選択縁を取り入れて継続されてきた姿を鑑みると、佐原の祭りにおいては、社会統合と共同幻想の両者が創出されていると考えられる。佐原の祭りにおいて共有されている「群れの一体感」とは、その両者に通ずる共同の「楽しみ」に他ならないであろう。それゆえ、現在の佐原の祭りは、伝統的な祭りの姿を取りながらも、現代社会に生きる人々にとって求められる文化の一形態として存在していると考えられる。

「ここ10年前後の間に、佐原の経済は以前にも増して悪化している」という声は、ヒアリングするなかでも度々耳にした。その一方で、20年前頃から本格的にスタートしたまちづくり活動団体は、現在まで継続されている。また、町内における佐原の山車祭りは、経済の低迷に抗うかのごとく、江戸期から現在まで続けられている。佐原の祭りが自己充足的なものへと変容し、現代人の「楽しみ」となっていることをふまえれば、この祭りはたとえ高齢化や経済の低迷が深化していったとしても、その姿を変えつつも伝統的な祭りとして、地縁に基づきながら当地域において継続されていくだろう。そして、祭りが継続されている限りにおいて、当地域には祭りを介した帰属意識が脈々と息づいていくのである。

### （3）本稿の到達点と意義

本稿の到達点として以下の2点が挙げられる。

- 一、 変容を遂げている佐原の山車祭りの実像を明らかにする。
- 二、 町内社会が変容するなかで、伝統的な祭りの現代における存立基盤と、その意味を分析する

佐原の山車祭りが現在までに遂げてきた変容を詳細に記述するとともに、現在の姿を捉えるという過程を通して、佐原地域の社会構成の変容を読み解いたことが、1点目の意義である。佐原の祭りについての文献は多種存在するものの、とくに戦後の山車祭りの姿の変容や、現在の町内組織の比較を行っているものはなかった。それゆえ、これらに焦点を当てて、佐原の祭りの変化とその背後にある社会の変容について、本稿では考察し得たと考えられる。

2点目については、地域共同体が崩壊するなかで、地縁に基づいた伝統的な祭りが持つ意味とは、という問いに対して、佐原の祭りを例にとり筆者なりの回答を示したことが意義と言えよう。現在の伝統的な祭りの存立基盤には、「地域帰属を楽しむ」という目的が存在し、そのような祭りの存在が他地域活動にも波及している。このことから、地域に根付い

ている祭りなどの伝統文化を足掛かりとして、まちの深層に迫ることが可能となるということの本稿では示した。

## 謝辞

佐原を対象地域として設定したのは、「人が温かい」と個人的に感じたからです。「1 尋ねると 10 教えてくれる」町なのではないか、と調査の初期段階に感じ、この町について調査したいと感じました。実際に調査を進めてヒアリングに足を運ぶたびに、町について熱く語ってくださる方に、行き当たりばったりでも出会えることの出来るこの町の魅力に、より惹きつけられました。住民としてのリアルな声をきかせてくださった忠敬茶屋のご夫妻、現在の祭りについて詳しくご指導くださったNご夫妻、祭りの歴史について明かしてくださったS親子、夏・秋祭りの際に右も左もわからない状態の私をお世話してくださったN P O 法人のスタッフの皆様方、そして、祭りで忙しいなか担い手としての声を聞かせてくださった新橋本、浜宿、下川岸の古役、当役、若連の皆様方に、心から感謝しています。

最後になりましたが、本稿を書き上げるに当たり、たくさんのご指導をくださいました浦野正樹教授に厚く御礼申し上げます。また、切磋琢磨し合える同期の皆様にも恵まれ、ゼミ生活を送れたことを幸運に思います。



## 参考文献

<文献>

- 阿久津昌三「都市空間と祭祀空間」町村敬志・西沢晃彦『都市の社会学』有斐閣アルマ、2000
- 芦田徹郎『祭りと宗教の現代社会学』世界思想社、2001
- 有末賢『現代大都市の重層的構造—都市化社会における伝統と変容』ミネルヴァ書房、1999
- 上野千鶴子「祭りと共同体」井上俊編『地域文化の社会学』世界思想社、1984
- 上野千鶴子「選べる縁・選べない縁」栗田靖之編『日本人の人間関係』ドメス出版、1987
- 安藤政武ほか『地域社会と民主的連帯』芽ばえ社、1985
- 及川祥平「佐原祭礼の変容—山車の維持・修理の分析を通して—」『小京都と小江戸 うつし文化の研究』岩田書院、2010
- 沖村陽一『地方小都市の市民等による市街地再整備従後評価及び市街地再開発推進以降の推定』星雲社、2010
- 小野川と佐原の町並みを考える会『町並み保存と再生』2010
- 金野啓史「佐原のまちづくりと「小江戸」「江戸まさり」」『小京都と小江戸 うつし文化の研究』岩田書院、2010
- 河野健二編『地域社会の変貌と住民意識』日本評論社、1975
- ぎょうせい「地域デザインの新展開 23 千葉県香取市佐原地区 小江戸の情緒を守る」『ガバナンス (83)』pp1-5、2008
- 小松和彦『祭りとイベント』小学館、1997
- 国立歴史民俗博物館『国立歴史民俗博物館研究報告 124』2005
- 佐々木嬉代三、中川勝雄『転換期の社会と人間』法律文化社、1996
- 佐原市『佐原市市民意識調査』1996
- 佐原市『佐原市統計報』1981
- 佐原市『商店街近代化地域計画報告書』1982
- 佐原市『平成 8 年度佐原市統計書』1996
- 佐原市『平成 12 年度佐原市統計書』2000
- 佐原市教育委員会『佐原山車祭調査報告書』2000
- 佐原商工名鑑出版委員会『佐原商工名鑑』佐原商工会議所、1991
- 佐原町『佐原町誌』1931
- 島恭彦『地方財政の理論と実態』有斐閣、1955
- 白井清兼・西村崇・山本淳子・伊藤興一・加藤浩徳・城山英明「旧佐原市地区におけるまちづくり型観光政策の形成プロセスとその成立要因に関する分析」『社会技術研究論文集 Vol.6』社会技術研究会、p.93-106、2009
- 添田昌志「まちの資源を活かすために」『東京生活ジャーナル』財団法人ハイライフ研究所、2009
- 田中重好『共同性の地域社会学』ハーベスト社、2007

千葉県中小企業指導所『佐原市商業の現状と将来 勸告編』1966年  
千葉県中小企業総合指導所『佐原市広域商業診断報告書』1972  
千葉県中小企業総合指導所『佐原市広域商業診断報告書』1988  
千葉県立房総のむら『佐原市本宿の歴史と民俗』1992  
東京大学教養学部文化人類学研究室『佐原における商家の生活と家業』1994  
中川勝雄「地域社会変動と住民組織・住民運動」『産業変動下の地域社会』学文社、1996  
林慶澤『日本の地方都市における商家の家業と社会的関係』東京大学、1998  
深澤あかね「商業町の祭り研究における分析視角の検討」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』2010  
福武直『日本社会の構造』東京大学出版会、1981  
福武直『日本人の社会意識』三一書房、1960  
古城利明『地方政治の社会学』東京大学出版会、1977  
牧野眞一「小江戸としての栃木—舟運の歴史と山車祭りから—」『小京都と小江戸 うつし文化の研究』岩田書院、2010  
松崎憲三「「小京都と小江戸」論に向けて」『小京都と小江戸 うつし文化の研究』岩田書院、2010  
松平誠「都市祝祭の現代的意味」『都市問題』東京市政調査会、1999  
松平誠『祭の文化：都市がつくる生活文化のかたち』有斐閣、1983  
松平誠『祭りのゆくえ—都市祝祭新論』中央公論新社、2008  
松平誠『都市祝祭の社会学』有斐閣、1990  
森田三郎『祭りの文化人類学』世界思想社、1990  
森田伶『岸和田祭音百景』民の謡、2007  
米山俊直「地縁再生の装置と祭礼」『都市問題』東京市政調査会、1999  
米山俊直『都市と祭りの人類学』河出書房新社、1986  
吉田竜司「伝統的祭礼の維持問題」龍谷大学社会学学会、2010  
和崎春日『左大文字の都市人類学』弘文堂、1987

#### <HP>

千葉県 HP <http://www.pref.chiba.lg.jp/> 2012年12月参照  
香取市 HP <http://www.city.katori.lg.jp/> 2012年12月参照  
佐原商工会議所 HP <http://www.sawara-cci.or.jp/> 2012年12月参照  
佐原商店会連合会 HP <http://www.sawara-shoren.jp/> 2012年12月参照  
佐原の大祭 HP <http://www.city.katori.lg.jp/05sightseeing/taisai/index.html> 2012年10月参照  
水郷佐原観光協会 HP <http://www15.ocn.ne.jp/~skk/> 2012年12月参照  
NPO 法人小野川と佐原の町並みを考える会 HP <http://www.sawara-machinami.com/>

2012年11月参照

佐原の町並み HP <http://www.katorishi.com/machinami.html> 2012年12月参照

株式会社ぶれきめら HP <http://www.kimera-sawara.co.jp/> 2012年11月参照

株式会社ゼットやっぺい HP <http://www.z-yappei.co.jp/> 2012年12月参照

佐原おかみさん会日記 HP

[http://www.burat.jp/members/blog/blog\\_list.200610231114-5000042.200610231114-5000](http://www.burat.jp/members/blog/blog_list.200610231114-5000042.200610231114-5000)

043 2012年1月参照

社長☆ブログ「社長のつぶやき」桶市ハウジング <http://blog.livedoor.jp/okeichihousing/>

2012年1月参照